アマガミ　とある男子高校生の物語

月下氷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アマガミ　とある男子高校生の物語

【Ｎコード】
Ｎ０１７６Ｚ

【作者名】
月下氷人

【あらすじ】
輝日東高校に入学した主人公『加藤　悠人』がおくる普通？の高校生活の物語です。
アマガミ２期放送するので、思わず書いてしまいましたー。物語は高校１年生から始まります。メインヒロインは未定です。

主人公設定（前書き）

本来のアマガミは９０年代のお話ですが、この小説では２０１１年辺りの物語と設定してます。なので、携帯電話、ｐｃ、ｐｓｐ、ｗｉｉなど余裕で出てきます。

主人公設定

※若干ネタバレがあります

本作の主人公

・名前　加藤　悠人（ゆうと）
・クラス　１年Ａ組→２年Ａ組
・誕生日　１０月１４日
・身長　純一より少しだけ低い
・髪型　純一より長い髪
・顔　イケメン（女性顔に近いかも）
・性格　少しめんどくさがり屋　天然
・家族構成　父、母、妹
・学力　１位、２位を争うくらい頭がいい
・特技　ギター（アコギ、エレキ）　ピアノ　料理　水泳　ケンカ
・好きなもの（こと）　楽器を弾く　アニメ　漫画　お宝本、ＤＶＤ　甘いもの　可愛いもの

輝日東高校の生徒会長をしている。（訳あり）
運動もほぼできる。
純一、美也、梨穂子とは幼馴染。梅原とは小学生から、薫は中学からの悪友。
制服はかなりくずしている。（シャツ出しやネクタイを緩めているなど）
一人暮らしで一戸建てに住んでいる。
親と妹は転勤でアメリカに住んでいる。
水泳は母親に無理矢理やらされた。けど、ピアノ、ギターは自分も好きで、父親から習った。
顔は女性顔に近い。ギリ男性顔。女顔と言われるのが嫌い。
ケンカがかなり強い。暴力事件も何度も起こしている。このことは、純一とその関係者しか知らない。

主人公設定（後書き）

Ａｎｇｅｌ　ｂｅａｔｓ！の２次創作と同時進行なので、更新が遅れる場合がありますので、その時はすみません。

第1話　入学と生徒会長就任（前書き）

どうも月下氷人です。アマガミの小説どうしても書きたくて書いてしまいました。どうぞよろしくお願いします。

第1話　入学と生徒会長就任

俺は今日から高校生になる。
やったぜー。
俺は気分がいいので親友の橘純一を起こしに行きたいなと思います。
ちなみに純一の家は俺の家から徒歩五分くらいです。

ピンポーン

「加藤でーす」

ガチャ

「おっ美也ちゃん」

「あっユウ君。おはよう」

「おはよう」

彼女は橘美也。純一の妹である。
美也ちゃんは猫っぽくてかわいいなー。

「何ジロジロ見てるの？」

「あ、いやー、美也ちゃんが可愛くて」

「ちょ…／／／　朝から何言ってるの／／／」
「いやー、それより純一起きてる？」
「にぃにならまだ寝てるけど…」
「相変わらずだなー。今日から高校生なのに…」
「そっかー。にぃにとユウ君はもう高校生かー」
「うん。美也ちゃんは中３だっけ？」
「そうだよ。受験勉強めんどくさいよ」
「まあ、そうだけどあっという間だよ」
「そうかなー」
「うん。そろそろ純一起こさないと」
「そうだね。上がってー」
「それじゃあ、お邪魔します」
俺は橘家へ上がらせてもらった。
俺は純一の部屋に行った。

「いない…ってことは押入れか…」
俺は押入れを開けた。
「起きろー。純一」
起きない…。そうだ！！
「俺のｉｐｏｄを音量ＭＡＸにして…」
俺は純一にイヤホンをさせ、音量ＭＡＸで音楽をかけた。
「ギャーーー！！！」
「やっと起きた」
「何すんだよー」
「純一が起きねーから」
「てかなんでユウがここにいるの？」
「おまえを起こしに来た。今日から高校生だろ。ほら、早く制服に着替えろ」
「へいへい」
俺は下に戻り、美也ちゃんと適当にしゃべった。
その後、純一がおりて来て、朝食を食べ、行く準備が整った。ちなみに俺も朝食をいただいた。

「よし、じゃあ行くか」

「そうだな」

「にぃにとユウ君いってらっしゃーい」

「美也ちゃん学校は」

「みゃーは明日から」

「そうか、じゃあ」

俺は橘家をあとにした。

登校中

「今年こそは彼女つくりたいなー」

「はぁー」

純一は大きく溜息をついた。

無理もないかー。あのクリスマスのことといまだに引きずってるみたいだし…。

「元気だせよ、純一。今年はできるよ」

「いいよなーユウは。イケメンだし、頭いいし…。おまえ絶対モテてるだろ！？」

「んなことねーよ」

「絶対にモテてるね！！」

「どーした2人とも？」

突如不審者が現れた。

「「おまえだれ？」」

「2人とも会っていきなりそれかよー」

もちろん知っている。こいつは梅原正吉。悪友だ。

「まあこれを見てみ？」

「「おおーー！！　これは！？」」

「お宝本だぜ」

「いやー思い出した。君は小学生からの悪友の梅原正吉君ではないかー。なあ純一」

「いやー僕も今思い出したよー」

「そうかそうか。いやーこれは手に入れるのが大変だったぜ。あとで見してやるよ」

「「流石梅原ー！！」」

ちなみに俺はこういう本やＤＶＤはけっこう好きである。見ちゃ悪いか！？　俺だって男だぜ！？
こういうのに興味あって当然だろー。

「さてそれは入学式が終わった後のお楽しみってことでー」

俺らは学校へ向かった。

しばらく歩いていたら、俺の携帯が振動した。
メールだ。

「えーと、げっジジィからだ」

「ジジィって誰だ？」

「輝日東の校長だ」

「おまえ校長と知り合いなのか！？」

「そうなの！？」

「まあ、一応。親戚でな。あのジジィが入れって言ったからここに

入った」

「すげーな」

「うざいだけだ。えっとメールの内容は…」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーー
学校に着いたら、校長室へ来てくれ。
よろしくー（＾－＾）／
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーー

「めんどい…」

「校長顔文字使ってるな」

「そうだね…」

少々頭がおかしい校長である。

そんなことしてるうちに学校に着いた。
俺たちは今、クラス表を見ている。

「お、俺A組みだ」

「僕もA」

「俺もだ」

「また一緒か」

「ああ」

「そうだね」

ちなみに中学の時も同じクラスだった。

「んじゃ俺は校長のアホのとこに行ってくるから」

「ああ。んじゃまた後で」

「じゃあな」

俺は校長室へ向かった。

本当何の用だよ？

校長室

「来たね」

「何のようですかジジィ」
「ジジィと呼ぶな！」
「んで何のよう、ジジィ」
「せめて学校でくらいちゃんと校長先生って呼んで」
「用件無いなら帰りますよ」
「わかったわかったからー。帰らないでー」
「んで何の用です？」
「ゴホン。実は昨年度で生徒会長が転校してしまって。それで、悠人に生徒会長をしてもらいたいのだが…」
「お断りです。では失礼します」
「待ってー。もう少し考えてよ」
「面倒そうなんで」
「そう言わず」
「そもそもなんで俺なんですか？　今の三年生にでも頼んでくださいよ」
「何のために奨学金を出したと思ってる？」

「俺を生徒会長にするため？」

「ダッツライト！！」

「殺す！！！」

「ごめんなさいごめんなさい」

「いいのか？一年の俺にやらせて？」

「問題はない！！　すでに3月の修了式で言ってある。来年度の生徒会長は入学する1年生がやると」

「それで何でそんなに俺をそんなに生徒会長にしたがる？」

「親戚の関係だから」

「それだけ？」

「それだけ」

「殺す！！！」

「待った待ったー！！　じゃあ交渉しよう」

「その手には乗らん」

「もし生徒会長になってくれたら、私の秘蔵のお宝本とＤＶＤセットをプレゼントをしよう」

「ちょっと考えさせてくれ」
エロ本とエロＤＶＤで考えを変えるとか俺、どんだけの人間だよ…
「じゃああともう少し奨学金くれたらやる」
「わかった」
「よし、交渉成立ー。生徒会長になってやるよ」
「おおーありがとう」
「いえいえ。お宝本とＤＶＤもよろしくお願いしますよ」
「もちろん」

こうして俺は生徒会長になった。
エロ本とエロＤＶＤのために…

１－Ａ教室

俺の席は窓際の１番後ろの横である。左隣は女子である。俺の斜めが純一で俺の右隣が梅原である。

「あんたもこのクラスなの？」
「お、薫かー。久しぶりー」
「久しぶりー」
「そういえば、純一たちは？」
「トイレにでも行ったんじゃない？」
「そうかー」
「ジーー」
「なにジッと俺の顔を見てるんだよ？」
「いやー前々から思ってたけど、けっこうユウって女顔だなーって」
女顔だと…。　けっこう凹むぜ…。
「いやそんなに凹まないで。よーく見たらよ」
「そうか…。よーく見たからか…」
「私もちょっとトイレ行ってくんねー」
「ああ」

薫もトイレに行ってしまった。
にしてもけっこう凹むなー。
……暇だなー。お隣さんにでも声をかけよう。

「お隣さん。名前なんて言うの？」

「え？　田中恵子です…」

「田中かー。俺は加藤悠人。みんなにはユウとか呼ばれてるよ。まあ、好きなように呼んで。よろしくー」

「よ、よろしくお願いします…」

あら、ちょっといきなりすぎたか？

「あ、わりぃー。いきなりすぎたかー」

「そんなことない。嬉しい…。話しかけてくれて」

「そうか、それはよかった。ところで俺の顔って女顔？」

「え？　別にそこまで女顔じゃないと思う…」

「少しは女顔っぽいってこと？」

「う、うん」

「そうか…」

「でもその……かっこいい顔だと思いますよ」

田中が頬を赤くしながら言った。
その照れた顔かわいいなー。

「そんなに見ないでください…／／／」

「いや、かわいいなーって思って…」

「え／／／！？　そんなことないですよ／／／」

「いやかわいいって。それよりありがとな」

「え？」

「俺の顔のこと」

「いえ」

「あと敬語使わないでよ」

「え！？」

「俺らもう友達だろ」

「あ、うん／／／」

こうして田中と友達になった。

しばらくしたら、先生が来た。

「私がこのクラスの担当の高橋麻耶です。
よろしくね」

「なあユウ」

「どうしたマサ」

ちなみに俺は梅原正吉のことをマサと呼ぶ。

「あの先生けっこう美人じゃね？」

「確かに…」

純一にも確認してみよ。

「なあ純一…？」

……ダメだ。こいつかなり見惚れてる。
こいつ年上好きだからなー。

「静かに！！　加藤君」

「すみません。ってよく俺の名前すぐにでましたね」
「まあ、あなたは有名だから」
「有名？」
「おまえもう何かやらかしたのか！？」
「そうなの！？」
「流石ユウね」
マサ、純一、薫が言ってきた。
まあ、多分あれのことだろう。
「まあ、加藤君のことはあとでってことで。これから入学式だから。廊下に並んで体育館に行くわよ」
入学式かー。めんどい…。
俺たちは今体育館に向かってます。
はいかなりめんどいです。帰ってギターでも弾きたいです。
「なあユウ、一体何やらかしたんだ？」
「もしかしたら校長先生と関係あるの？」

「そういえば朝呼ばれてたなー」

「純一君、正解でーす」

「んで何があったんだ？」

「実はな…」

俺は純一とマサに生徒会長になったことを話した。

「「なにーーー！？　ユウが生徒会長だって！？」」

「声が大きい」

「よく引き受けたよね」

「ある物を手に入れるために俺は生徒会長になった」

「「ある物？」」

「それはだな…」

「「なにーーー！？お宝本とお宝本ＤＶＤだと！？」」

「ああ。このあと取りに行くつもりだ。マサのと一緒にあとで鑑賞会だ」

「「おう」」

訳のわからないやりとりをしてるうちに体育館に着いた。

入学式開始5分後…

俺爆睡中。

「ええ、新入生の皆さん入学おめでとうございます。えー…」

「…ｚｚｚ」

「起きろー！！！」

「イッテーー！！　何すんだよ麻耶ちゃん！？」

「麻耶ちゃんって何よ。それより寝るなー！！」

「へーい」

「クスッ」

前にいる田中に笑われた。

アホ3人（純一、マサ、薫）は腹を抱えながら必死で笑いを抑えていた。あとで覚えとろよー！！

「えっと実は今年度の生徒会長がこちらの都合上新入生の方が生徒会長になることになりました。それじゃあ、加藤君でてきてください」

「はぁー！？」

「「「あっははは」」」

アホ３人が笑いだした。

「てめーら笑うな」

「まさかユウが生徒会長になるとは」

なぜか薫が知っていた。大方純一かマサにでも聞いたのだろう。

「早く教壇へ行ってください」

「へーい」

俺は教壇へあがった。

「えーと、何か挨拶すればいいんですか？」

「はい」

まさかこんなことになるとは…

「えーと、急遽生徒会長になることになった１－Ａの加藤悠人です。まあ、なった理由は、ここのアホの校長のせーです。別に俺がなりたいっていってなった訳でなないんで。よろしくー」

適当に挨拶して俺は教壇を降りた。

そして入学式が終わり、教室へ戻った。
俺は薫と話をしていた。

「ユウよく引き受けたわね。ユウ頭はかなりいいけど、こういうのは普通やらないでしょ？」

「まあね。ある物のために俺は生徒会長になったんだ」

「ある物？」

「それはご想像にお任せします」

「ふーん。言えない物か」

「女子に言ったらひかれる」

「もうわかったわ。よくそれだけで引き受けたわね」

「まあ、それだけじゃないんだよね。いろいろお世話になってるし…。その恩返しみたいなのもある」

「そう。そういえば私新しい友達ができたのよ」

「友達？」

「私の友達恵子でーす」

「何だ田中か」

「何だって何よ？」

「もうすでに俺らはお友達です。なあ田中」

「う、うん／／／」

「ちょっと恵子？　何で顔が赤いの？　ユウ、何かしたでしょ。お尻触ったとか」

「俺はただ普通におしゃべりしただけだ」

「嘘おっしゃい！！」

「んだとーー！！」

「はいはい、みんな席着いて」

麻耶ちゃんが来た。

「ほら、加藤君、棚町さん、早く座りなさい」

「へーい」

「はーい」

俺らは麻耶ちゃんが言った通りに座った。

「明日は係り決めと教科書配布があるから。あと加藤君はあとで職

員室に来て」

「えー！！」

「来るのよ」

「…へい」

「じゃあ今日は終わり」

俺は職員室に行くことになった。
このあと純一とマサとでお宝鑑賞会だというのに…。あとで校長室に行かないといけないし…。

「なあ純一、マサ、ちょっと待っててくんない」

「了解だよ」

「了解。大将のお宝のためだ」

こうして職員室に俺は行った。

「来たわね」

「何の用です？　麻耶ちゃん」

「その麻耶ちゃんっていうのやめなさい」
「いいじゃん」
「じゃあ何で麻耶ちゃんって呼ぶのよ」
「それは…可愛いから？」
「私が？」
「そう」
「…／／／。お、お世辞でも嬉しいわ／／／」
「お世辞なんかじゃありませんよ。それじゃあ俺はこれで…」
「待ちなさい。本題がまだ残っているわ」
「う…」
早く鑑賞会をしたい…
「まあすぐに終わるから」
「早くしてくださいよ」
麻耶ちゃんから生徒会長のことについていろいろ聞かされた。
めんどくさいなー。

「まあ生徒会長についてはこのくらいかな。
今日はもう帰っていいわよ。明日からビシバシ働いてもらうから」

「へーい。そんじゃ、さいならー」

「さよなら」

俺は校長室へ行き例の物を手に入れ、純一たちと合流した。

「なあどこで鑑賞会する？」

「うちは美也が多分いるから…」

「それじゃあ俺ん家でいいよ。俺現在一人暮らしだし」

「そうか。ユウの家族アメリカにいるんだっけ？」

「イエス」

「それじゃあ決まり！！」

俺の家で鑑賞会をすることになった。

この後はいろいろと問題があるため、カット

純一、マサ帰宅後

いやー、鑑賞会楽しかったなー。
ジジィもいいの持ってるなー。
そんな人が高校の校長やっててていいのか？
……風呂入って寝よ。

俺は風呂に入ってすぐに寝た。

なんかいろいろと疲れたぜ。

第1話　入学と生徒会長就任（後書き）

なんか無理矢理感あってすみません。
キャラの口調とか間違ってたらすみません。
あと主人公は梅原のことを「マサ」と呼んでいますが、小野大輔さんＣＶ（ドラマＣＤ）の原作の主人公の悪友「マサ」とは違いますので。ややこしくてすみません。悪友「マサ」は登場しませんので。

第2話　男子高校生の一日（前書き）

会話文ばっかですみません。

第2話　男子高校生の一日

俺今一人で登校なう。
今日は純一を起こしに寄らなかった。
毎回毎回めんどいじゃん。
お、あそこを歩いているのは、梨穂子じゃん。

「おはよう梨穂子」

「あ、おはよう悠人」

「あ、君ってあの昨日の生徒会長？　桜井と知り合いだったんだー」

「うん、幼馴染なんだー」

「えっと…どちらさま？」

「あ、ごめん。私伊藤香苗っていいます。よろしくね」

伊藤香苗かー。笑顔が可愛いなー。

「俺は加藤悠人。えーと……伊藤の笑顔って可愛いなー」

「えっ／／／／　それ本気で言ってる／／／／／！？」

「嘘だったら言わないよ」

顔が真っ赤な伊藤も可愛いなー。

「悠人天然だからねー」
「梨穂子には言われたくないよ」
「むぅー」
「梨穂子の怒った顔も可愛いな」
「そ、そう／／／　ありがとう／／／」
照れた梨穂子もこれまた可愛い。
「……／／／」
「おーい伊藤？　大丈夫か？」
「…はっ。だ、だ、大丈夫な訳ないでしょ／／／　いきなりあんなこと言って／／／」
「言っちゃダメだったか？」
「そんな訳ないけど、でも／／／」
「いいじゃねえか」
「う、うん。私のこと香苗って呼んでいいから」
「わかった。香苗」
「悠人すごいなー。会ってすぐに仲良くなるとは」

「そうか？」

「桜井に悠人君、早く行こう」

「おう」

「うん」

こうして俺、梨穂子、香苗で登校した。

1―A教室

「おはよう田中」

「おはよう加藤君」

「あ、俺のこと下の名前で呼んでくれない？　加藤だと少し反応が悪いから」

「え！？　う、うんわかった。わ、私のことも下の名前で呼んで／／／」

たな…　恵子が照れながら言った。
下の名前で呼び合うくらいで照れるかな？

「わかった、恵子」

「おっすユウ」

「薫か。おっはー」

「って何で恵子また顔が赤いの！？　ちょっとユウまたなんかやったでしょ！？　今度はスカートめくったとか」

「んなことしてねーよ？　ただ下の名前で呼び合おうって言っただけだ」

「…あんた凄いわね」

「何が？」

「……ダメだこりゃ」

もう何言ってるのかわからない…。

「おっすー、ユウ」

「おっすマサ」

「そういえばお前けっこう噂になってるぞー」

「ああー。生徒会長のことか」

「そうそう。なんかもう1年生だけじゃなくて2、3年生でも噂になってるらしいぜ」

「へぇー。でも私は中学の時からの付き合いだけどさー、あんたって頭はいいけどこういう面倒なことはやらないやつじゃん」

「だから言っただろ。お宝のためだと」

「薫。お宝って何？」

「ああー、あれよ。俗に言うエッチな本とかＤＶＤよ」

「え…あ…／／／　悠人君ってえ、えっちな本とか読むの？」

「あ、いや違うんだ！！　違くないけど…」

「案外こいつはあーゆう本を読むやつだから」

「う、うるさい／／／」

「はい、席について」

麻耶ちゃんが来た。

あれ…。そういえば純一まだ来てないな。

「遅れてすみませんー！！」

「橘君。入学式の次の日に遅刻なんてどういうことなの！？」

「本当にすみません」

「…早く席に着きなさい」

「…はい」

…純一には呆れるぜ。

「それじゃあ今日は最初に係り決めをやっちゃいたいと思います。じゃあ加藤君がとりあえずしきって」

「えー！？　俺ー！？」

「生徒会長でしょ。さあ、早く」

「…了解です」

めんどくせーなー。まあ、ちゃちゃと終わらせますか。俺は教卓のとこに立った。

「じゃあとりあえずクラス委員を決めたいと思います。じゃあ誰かいないか」

シーーン

「じゃあ橘君ってことで」

「僕別に挙手してないだろ！！」

「いやー、やりたそうな顔してたから」

「どんな顔だよそれ！！！」

「じゃあマサ」

「なんでやねん」

「はい、ツッコミありがとねー。じゃあ真面目に、誰かいないかー」

「じゃあ誰もいないなら、私がやります」

「お、えーと名前は…絢辻さんだっけ？」

「はい」

「じゃあ絢辻さんに決定ってことで。じゃあ後は絢辻さんに任せます」

「わかったわ」

俺は絢辻に仕事を押し付け、席へ戻った。

いやー、ありがとう。

「じゃあ次は…」

他の人もどんどん係りが決まってった。
ちなみに俺は生徒会長だから何も係りをやらなくてよかった。
にしても絢辻けっこう綺麗な人だよなー。

休み時間

「なあユウ、純一。今日も午前中で学校終わるからゲーセンでも行かない？」

「俺はオーケー」

「僕もいいよ」

「棚町も行かないか？」

「私も行くー」

薫が行くなら恵子も誘おうかなー。

「ねえ、恵子も行く？」

「うん。行こうかな」

「ユウが女の子を普通に誘うとは…。流石ユウだぜ。橘も見習えよ」

「梅原には言われたくないよ」

こうして話しているうちに、休み時間が終わった。

この後は、教科書の配布だけで終わった。

「明日から始まるから。まあ午後は部活紹介のオリエンテーションだから授業は午前中だけよ。じゃあ今日は終わり」

午前中で終わる学校は楽でいいなー。

「あ、加藤君と…絢辻さん。ちょっと手伝って欲しいことがあるからあとで職員室に来てね」

「わかりました」

「えーー」

「来るように」

「…了解です」

これからゲーセン行く予定があったのに…

「悪いみんな。さっさと終わらせてすぐ行くからいつものゲーセンで待ってて」

「わかったよ」

「了解！！」

「オーケー」

「うん」

みんなに謝り、職員室へ行くことにした。絢辻と一緒に行くか。

「絢辻ー。とっとと仕事終わらそうぜ」

「うん」

絢辻を誘い、職員室へ向かった。

「加藤君って何で生徒会長になったの？」

「できれば下の名前で呼んでくれない？　俺苗字で呼ばれると、どうも反応が悪いから」

「わかったわ。確か下の名前は…」

「悠人だよ」

「悠人君ね」

「おう」

会話してるうちに、職員室へ着いた。
荷物運びをされた。めんどかったぜ。

「荷物運びを頼むとは…」

「まあ、あの量を先生一人は大変よ」

「そうか？　けどこっちの身にもなって欲しいよ」

「ふふっ。そうね」

お、絢辻の笑顔かわいいなー。

「どうしたの？　そんな私のこと見て」

「いやー、絢辻の笑顔がかわいいなーと思って」

「あ、ありがとう／／／」

お、今度は照れた。

「んじゃ俺もう行くね。また明日ね」

「うん。また明日」

俺は絢辻と別れ、純一のいるゲーセンへ向かった。

ゲーセン到着ー。
さてどこにいるかな？
俺はとりあえず格ゲーコーナーに行ってみた。

「ビンゴ」

みんなを発見した。

「みんな、遅くなってごめん」

「遅いぞ、大将」

どうやら純一とマサはが格ゲーをやっており、薫と恵子がそれを見ていた。

「じゃあ俺音ゲーやってくるから」

「じゃあ私も行くー」

「じゃあ私も」

俺、薫、恵子は音ゲーコーナーに行った。
ちなみにやる音ゲーは○ｕｂｅａｔ（○ビート）である。あれ超面白いよ。

「お、全部の台空いてるじゃん。じゃあ対戦しようぜ」

「いいわね」

「うん」

俺は１００円入れた。
おんなじ曲ならＬｅｖｅｌは各個人で決められる。

「じゃあこの曲で」

「オーケー」

「うん」

俺はＬｅｖｅｌ１０でスタート！！

「あんた凄いわね。どんだけやってるのよ」

「まだ始めて２ヶ月ちょい」

「呑み込み速いわね…」

「薫だってけっこうできてるじゃん」

「私も少しやってたりしてー」

おっ、薫の笑顔意外とかわいい。

「お前の笑顔って意外とかわいいんだな」

「な、何よいきなり／／／　照れるじゃない／／／」

「ははは」

「……」

恵子がなんか睨んでくる…。

「……そう睨まないでくれ。ほれ、なでなで」

俺は恵子の頭を撫でた。

「／／／／」

あ、照れた。かわいい。

「ちょっと便所に行ってくるね」

「わかったわ」

「う、うん」

俺は便所へ向かった。

「あいつってば…。平気であんなこと言ってくるなんて…。天然だわ」

「うん。私も天然だと思う」

「ちょっとそこの女の子たち」

俺は便所を済まし、薫たちのところへ向かった。
ん？　男2人が薫たちのことナンパしてる？

「だから俺たちとこれから遊ばない？」

「遊ばないわよ」

「いいじゃんよー」

完全ナンパだな。恵子なんてもうかなり怯えてるじゃん。早く助けないと。

「その辺にしてもらえますか？」

「なんだてめえ？」

「ユウ」

「悠人君…」

「彼女らの友達です」

「邪魔すんじゃねーぞ」

「そうだぞ」

男のうち1人が殴りかかってきた。ここで俺が殴ったら、警察に確実に連行させられるな…。俺は男のパンチを片手で受け止めた。

「何！？」

「あのー。痛い目に合いたくなかったら俺の視界から消えてもらえますかね」

俺は男2人を睨みつけた。

「ひっ…。おい逃げるぞ」

男2人は逃げていった。よかったー、暴力ほぼなしで解決できて。警察沙汰はもうごめんだからなー。

「ありがとう、ユウ」

「おう。って恵子大丈夫？」

恵子が泣いていた。怖かったんだな。

「もう大丈夫だ。ごめんな。俺が誘ったばかり…」

俺は恵子の頭を撫でながら言った。

「ううん。悠人君のせいじゃないよ」

「おいーす。…て何田中さんを泣かせてんだよ？」
「どうかしたの？」
純一とマサが来た。来るのおせーよ…。
俺はさっき起きたことを話した。
「そりゃあ大変だったな」
「ユウ！！　暴力とかしなかったか！？　怪我とかない！？」
「大丈夫だ。睨みつけたら逃げて行った。怪我もない。ありがとな」
「よかったよ」
俺の事を純一はよく知っている。同時に純一の事を俺はよく知っている。
その後、みんなでレースゲームしたりした。
「今の時間は…1時か。みんな昼飯とかどうする？　みんなで食べに行く？」
「悪りぃ、大将。これから俺店の手伝いがあるから」
そうか。マサの家は寿司屋なんだっけ。
「ごめーん。これから私もバイトがあるから」

「私も用事が…」

「僕は別にいいよ」

純一だけか…。

「じゃあ2人でどっか食べに行くか」

「そうだね」

「じゃあこれで解散だね。恵子に薫…、今日は本当にごめんな」

「いいよ別に。あんたが悪い訳じゃないし。楽しかったわよ」

「うん。悠人君が悪いわけじゃないから」

「ありがとう」

マサ、薫、恵子と別れ、純一と一緒に飯食いに行った。

どこに行くか迷った結果、無難にファミレスにした。

俺たちはファミレスに入った。

「いらっしゃいませー。只今店内は大変混み合ってますので、少々待っていただく事になりますが…」

そうなのか…。お、あそこにいるのは梨穂子と香苗じゃん」

「向こうに知り合いがたまたまいたので…」
「はい、わかりました」
「え、知り合い？」
「ほらあそこに」
「あ、梨穂子じゃん。ともう1人は知らない子だよ。いいの？」
「問題ない。俺は知ってる。女の子と仲良くなれ」
「えー」
「ほらほら」
俺は無理矢理純一を連れて行った。
「相席いいですか」
「え！？　って悠人君かー」
「あ、悠人に…純一！？」
「やっほー」
「ども…」
梨穂子の反応…。もしかしたら…純一のことが好きなのか！？　…

あとで聞いてみよう。
俺と純一は席に座った。
ちなみに座り方は

香　　俺
┌┈┈┈┈┈┐
└────┘
梨　　純

である。わかりずらいなー。

「橘君も悠人君と桜井の幼馴染なんだ」
「ええ、まあ」
「2人はもう頼んだの？」
「ううん。まだ来たばっかなの私たち」
ジャストタイミングで来たな俺たち…。
「じゃあ僕はミートスパゲティにしよう」
「私はカレーライスにしょうっと」
「私はオムライスと…」

「梨穂子…。ほどほどにしとけよ」
「うう…。純一のいじわる…」
「体重気にしてるんだろ」
「う、うん。じゃあオムライスだけでいいや
」
「じゃあ押すぞ」
俺は店員コールボタンを押した。
「ご注文の方はお決まりでしょうか？　ってユウに純一！？」
「よう、薫」
「お前これ狙って来た？」
「さあ」
ウエイトレス姿で薫が接客しに来た。
「こんにちは棚町さん」
「ハーイ、桜井さん…と…」
「伊藤香苗だよ。よろしくね」
「棚町薫よ。よろしくー」

女子3人が会話してる中、俺と純一は薫の太ももを拝んでいた。ニーソックスいいねー。余計太ももがよく感じる。

「ちょっと2人ともどこ見てるのよ／／／」

「いやー、その」

「薫の太もも」

「ユウ、そんなあっさりに」

「…本店はゲス野郎の御入店はお断りですので、とっとと出て行ってもらえます？」

ちょっと…怖いよ薫…

「「ごめんなさい」」

「悠人君と橘君って意外と変態さん？」

「「いや、その、これは男して…それより注文」」

「私オムライス」

「カレーライスで」

「僕はミートスパゲティで」

「俺は…チョコレートパフェで」

「昼食にパフェかよ」

「今日はそういう気分だから」

「はいはい。わかりました。少々お待ちを…」

薫がまた仕事に戻った。

「悠人君って甘いもの好きなの？」

「まあ、好きだよ」

「へえー（覚えとこっと）」

その後、注文したものきて、適当にしゃべりながら昼食を食べた。

「じゃあそろそろ行くか。純一、ゴチになりまーす！！」

俺は某番組のアレを言ってみた。

「「ゴチになりまーす」」

「なんでだよ！！」

「お前ビリだろ。あとおみや代も…」

「何の話だよ！！！」

「まあまあ、早く行きましょ」

俺たちは会計を済まし、店を出た。
あ、もちろん別々で払ったからね。

「じゃあ帰りますか」

「そうだね」

梨穂子と香苗と別れ、純一と一緒に帰った。

「じゃあねー、純一」

「うん」

純一の方が家が学校に若干近い。

俺は帰宅した。

今日は不良？に絡まれ、大変だったなー。

第2話　男子高校生の一日（後書き）

誤字脱字があったら、言ってください。

第3話　先輩と小テストと生徒会と…（前書き）

主人公視点でいきます。

第3話　先輩と小テストと生徒会と…

俺は朝早く目覚めてしまった。ちなみに4時半である。
暇だったので、アコースティックギターを弾いていた。ちなみに俺の部屋の壁防音だから、この時間に弾いても問題ないぜ。
俺は1時間くらいギターを弾いた。

「まだ5時半かー。もうチョイ練習するか」

父さんに習ったことを思い出しながら練習した。
俺の父さんはバンドやってたりします。けっこう有名でなんかランキングとかで上位に入ったり、音楽番組出たことがあるらしいです。言ったかもしれないけど、1年くらい前から両親はアメリカにいます。母さんの仕事で。あと俺に美也ちゃんと同い年の妹がいます。妹もアメリカにいます。本当は俺も行かされそうになったけど、拒否しました。
だって英語しゃべれねーし。

流石に少し指が痛くなってきたので、ギターをやめて、朝食にした。
ちなみに自分で朝食作りましたー。
何をだって？　まあ、普通のものですよ。

「ちょっと早いけど、行くか」

俺は行くには少し早かったが、暇なんで学校に行くことにした。

7時、学校到着。

1ーA教室

「はい誰もいないー」

外で部活をやってる生徒はいた。多分2、3年生だろう。

「屋上にでも行こうかなー」

俺は屋上へ向かった。

俺は屋上へ向かうため、廊下を歩いていた。
角を曲がった時、誰かにぶつかってしまった。

「あ、すみません」

「こっちこそごめん。って君ってもしかしてあの噂の」

「はい、生徒会長ですけど」

「ちょっと何やってるのよ」
ぶつかった人の保護者っぽい人が来た。
お、2人とも美人だ。
「ごめんなさい。はるかが…」
「ねえ響。この子が1年生の生徒会長になった…」
「へえ。そうなの…ってちゃんと謝ったの？」
「謝ったよー」
「ちゃんと謝ってくれましたよ。こっちも少しよそ見してましたし」
「本当にごめんなさい」
「いえいえ」
カチューシャをつけた人はホワワーンとしてて、ポニーテールの人は真面目でしっかりとしていた。
「時間もあるし、少しお話でもしない？」
「いいですよ」
俺ら3人は屋上で話をすることにした。

「俺１－Ａの加藤悠人っていいます。呼ぶ時は、できれば下の名前でお願いします。加藤だと反応鈍くて…」

「わかったよ。私２－Ａの森島はるかっていいまーす。よろしくね、悠人君」

「了解よ。私は塚原響よ。クラスはこの娘と同じよ。よろしくね、悠人君」

「よろしくです。森島先輩、塚原先輩」

案の定、先輩だった。

「にしてもお二人方美人ですねー」

「そ、そう／／／　ありがとう／／／」

「え！？　私も！？　はるかだけじゃなくて！？」

「もちろんです」

「あ、ありがとう…／／／」

お二人とも照れた顔が可愛いですなー。

「ねえ悠人君？　なんで生徒会長になったの？
普通は2、3年生がやるのに」
「実はここの校長が俺の親戚でやれと言われたからやったわけですよ」
「へえーそうなの」
「そうなんですよ」
「私最初見た時、私のイメージとちょっと違ったな」
「どんなイメージだったんですか」
「んとねー、真面目そうな人」
「で見てみて？」
「可愛いなぁーって思った」
「この言葉は男性に対して使うものではありませんよ」
「だってどっちかというと悠人君、女の子の顔してるもん」
「女の子…」
それは俺に対して言っちゃいけない言葉です。マジ凹みます。
「あ、ごめんなさいね。もうはるかってば。男の子なのに、女の子

顔って言われるのはイヤに決まってるじゃない。大丈夫よ、悠人君。ちゃんと男の子の顔だから」

「ありがとう…ございます」

「ねえ、メアド交換して」

「いいですよ」

「じゃあ私も」

俺は2人のメアドをゲットした。
まさかこんな美人さん2人のメアドをゲットできるとは。

ちなみに俺が今知っているメアドは

純一
マサ
薫
梨穂子
美也ちゃん
ジジィ
父親（国際電話）
母親（同上）
妹（同上）
恵子（初めて話した時に）
香苗（初めて会った時に）
絢辻（麻耶ちゃんにこき使われたとき）
森島先輩（今さっき）
塚原先輩（同上）

ｅｔｃ…
である。

「森島先輩と塚原先輩って部活やってるんですか？」

「私は何もやっていないわ」

「私は水泳部に所属しているわ」

「俺も水泳はやってたんですよ。母親にやれって言われて…。でも今思うとやっててよかったなーって」

「へぇーそうなの。そうか、今日は午後に部活のオリエンテーションがあるんだっけ」

「ええ。でも俺生徒会長やってるんで」

「大変そうだもんね」

「あ、そろそろ朝礼の時間よ。はるかも悠人君も早く戻りましょ」

「わかったー」

「サボりたい…」

「悠人君、本当に生徒会長？」

「こう見えて生徒会長です」

「見えない…」

「そうだね。けっこう制服崩してるしね」

「この方が楽なんで」

俺の今の制服の着こなし方は青のTシャツ着て、Tシャツの上にワイシャツ上二つのボタンを開けて着て、ネクタイは緩め、シャツ出しをし、その上にブレザーを羽織っている。（ボタンはしてない）

…こんな説明どうでもよかったですね。はい。

塚原先輩が授業には出なさいと何度も言われたので、仕方なく教室に戻った。

1ーA教室

朝礼終了後

「恵子ー。一時間目ってなんだっけ？」

「数学だよ」

「ありがとう」

数学かー。じゃあ余裕かな。数学得意だし。

…便所に行こう。

俺は便所を済ました帰りに、梨穂子と香苗に会った。

「あ、おはよう、悠人」

「おはよー、悠人君」

「おはよう、梨穂子、香苗」

そういえば、梨穂子に聞きたいことがあった。

「ねえ梨穂子って好きな人いる？」

「え！？　なんでいきなり！？」

「もしかしたら純一のこと好きかなーと思ったから」

「お、桜井ー。橘君のこと狙ってるの？」

「いや…／／／　そんな…／／／」

こりゃあ決定だな。

「まあ、何か不安なことがあったりしたら、いつでも俺に相談していいから」

「私も力になるわよ」

「ありがとう、二人とも」

「香苗もいつでも相談していいから」

「いや…／／／　私は別に…／／／」

キーン、コーン、カーン、コーン

「じゃあ教室戻るね」

「バイバイ」

「またねー」

俺は教室へ戻った。

「えー、数学担当の西川です。よろしくー」

数学の先生は若い男の先生だった。
なんか優しそうだな。

「じゃあまずみんなの実力がどれくらいあるかテストしたいと思います」

「えーーー」（一同）

優しい先生ではなかったです。

「異論は認めませーん。じゃあテスト配るね」

やるっきゃないな。数学はまあまあ好きな方だし…。

「じゃあ制限時間は２５分。じゃあ、始め」

えーと…なかなか難しいなー。
……この因数分解めんどい…。
いろいろとくくんなきゃいけないし、たすき掛けはしなきゃいけないし…。
…これは…チェバの定理を使ってと…。
……まあこんなもんか。

けっこう鬼畜な問題だすなー。絶対中学でやってなさそうなのだしてくるし…。
俺は１０分で終了した。
…俺寝ます。グッドナイト…。

５分後

「おーい寝るなー」
西川先生に起こされた。
「寝させて西ちゃん。俺ギブ」
「ほら、頑張れ」
けっこう熱血な先生のようだ。
「わかりましたよ」
「クスクスッ」
あ、恵子に笑われた。
多分他の奴らも笑ってる…。
「はい、終了ー。隣の人とテスト交換して」

「ぐわー全然できなかったー」

「私もよ」

マサと薫が嘆いている。

「難しかったね」

「なんか鬼畜な問題ばっかだったような…」

俺は恵子とテストの交換をした。

交換する理由は、まあ、不正がないように、尚且手っ取り早く丸つけをするためである。だがこれは他人にテストの点数が見られてしまう。

「じゃあ（1）から。答えは…」

西ちゃんは答えと解説がどんどん言った。

「全部で10問だから、各5点で50点満点で」

ちなみに恵子は35点だった。まあまあじゃん。

「ほれ」

俺は恵子にテストを返した。

「すごーい！！　満点だよ」

俺も返された。満点だったらしい。正直ちょっと嬉しい。

「何ーー！？　ユウ満点だって！？　俺なんて１０点だぜ」

「私もよ」

マサと薫は１０点だったらしい。

「純一何点？」

「僕は４０点だよ」

純一けっこう点数高いやん。

「じゃあ後ろの席の人回収ー」

俺じゃん、後ろの席。めんどくさいがやらないわけにはいかないので、ちゃんとやった。

「悠人君頭いいんだね」

「そんなことねーよ」

なんか一度やったことを俺は忘れない。それで頭がいいんだと思う。でも小学生のときはけっこう必死で勉強してたけど…。

「じゃあ今日はこれで終わり」

休み時間は純一とマサで適当にしゃべった。

２時間目、英語

「英語担当の関根です」

中年のオバチャン先生だった。

「じゃあ実力テストをしたいと思います」

「えーーーー」（一同）

「簡単な問題ばかりだと思うんで」

どうだか…

「テスト配ります」

「制限時間は２０分。じゃあ始めてください」

よかった。文法とかの問題ばかりで。

……もうさっきのテストとやりとりが同じようなものなので、カットしちゃいます。

因みに５０点満点中俺は４８点、恵子は４０点、マサ２８点、薫２４点、純一２２点。

純一は英語が苦手のようだ。

３時間目は古典、４時間目は物理だった

昼休み

いやー、おなか空いたなー。

…そういえば、弁当ないんだった。

「純一、薫、マサ、恵子、食堂で飯食べない？」

「僕もちょうど食堂で食べようとしてたところだよ」

「いいわよ」

「了解だぜ」

「うん」

５人で食堂で昼食を食べることになった。

食堂

「いやー、席が空いててラッキーだったな」

「そうだね」

俺は醤油ラーメン、純一はカレーライス、マサと薫がパン、恵子が弁当である。

「恵子の弁当うまそうね」

「ありがとう」

「なあみんな森島先輩って知ってる？」

マサがみんなに聞いてきた。
俺はバリバリ知ってるが…

「僕は知らないな」

「私も」

「わたしも知らない」

「その先輩がチョー美人らしくて…　俺の友人から写真見せてもらったんだけど、本当に美人で…」

確かに美人だけど…　マサ、興奮しすぎ…

「とにかく森島先輩は「私がどうかしたの？」って森島先輩！？」

「この人が…。確かに美人さんだ」

「こんにちは、森島先輩、塚原先輩」

「こんにちは、悠人君」

「こんにちは、悠人君」

「ユウーー！！　なんで森島先輩とこんな仲がいいんだ！？　挙げ句の果てに森島先輩の友達まで手を出しやがって！！！」

「人疑義の悪いことを言うんじゃない！！　俺は今日朝早く学校に行って、たまたま会って友達になっただけだ！！」

「私森島はるかっていいます」

「塚原響よ」

「棚町薫です」

「田中恵子です」

「橘純一です」

「えーゴホンッ、梅原正吉です」

ズルズル…

俺はラーメンを食べていた。

先輩お二人を加え、しばらくおしゃべりした。

「じゃあそろそろ行くわね」

「バイバイー」

森島先輩と塚原先輩と別れた。

「いやー美人だったな」

マサ…　もうわかったから…　まあ…美人だよね。

「午後は部活紹介かー」

そうか。ってことは授業無いのか。やったぜ。

「みんな部活に入る？」

「僕は未定」

「俺も」

「私も」

「私はバイトで忙しいから入んないわよ」

「ふーん」

「部活紹介は体育館だから、もう行こうぜ。そろそろ時間だし」

俺らは体育館へ向かった。

部活紹介はたいして面白くなかったのでカット。
まあ、いろんな部活があることがわかりました。はい。

部活紹介終了後

俺と純一とマサは教室に戻るために廊下を歩いていた。

「なあ、俺、剣道部に入るわ」

マサが突然言ってきた。

「なんで？」

「…剣道部の紹介の時に出てた先輩に惚れたから」

……まさかの衝撃告白

「そ、そうかー。まあ、頑張れよ。応援してるから」

「うん、応援してるから」

「ありがとう」

そんな話をしていると、目の前に麻耶ちゃんが現れた。

「あ、加藤君。放課後生徒会の会議があるから参加してね」

「へーい」

生徒会長だから参加しないわけにはいかないか。

放課後

麻耶ちゃんに生徒会室？に連行された。

生徒会室？に入ると、女の子が1人いた。

「加藤君。彼女は生徒副会長よ」

「生徒副会長の橋本結衣よ。ちなみに3年生だよ」

見た目はとても可愛らしく、髪の長さは肩より少し上で髪の色は黒。身長はまあふつうかな。　……詳しくは設定で。

「新しく生徒会長になった1－Aの加藤悠人です。よろしくお願いします」

「橋本さん。あとはよろしくねー」

「はい」

先生が出て行った。

「へえー。君が加藤君かー」

「できれば下の名前で呼んでくれませんか？　反応鈍いんで」

「わかったよ。下の名前は…悠人君だっけ？」

「大正解です。それより他の生徒会の人いないんですか」

「基本この学校の生徒会は会長と副会長だけ。いろんな決め事をする時は、他の委員長たちや先生と話し合いをするわ」

ああー。委員会って昨日決めたあれかー。

ちなみに
生徒会（文字通り）
学級委員会（各クラスの学級員の頂点）
放送委員会（主に昼のテレビ放送。けっこう凝ってるらしい）
運動委員会（球技大会の準備等）
風紀委員会（文字通り）
図書委員会（図書室の管理）
保健委員会（保健の先生のアシスタントなど）
文化祭実行委員会（文化祭の準備等。創設祭とはまた別）
がある。
まあ、つまり委員長が生徒会の一員みたいなもんだな。

しばらくしたら、他の人も来た。

「じゃあ始めましょう。彼が新しく生徒会長に就任した…」

「加藤悠人です。よろしくお願いします」

パチパチ

一応拍手がきた。

※この後は、別に楽しいことがなかったのでカットします。カットばっかですみません。でも本当に楽しくなかったから。

下校

橋本先輩と別れ、俺は夕飯の食材を買おうとスーパーへ向かっていた。

歩いていると、そこに不良3人が女の子をナンパ？をしているのを発見した。

さて、どうする？

？助ける
？見て見ぬ振りをする
？通報する
？殺す

？は論外。？はいろいろとまずい。？はそんな時間はない。やっぱ？かー。

「そんなこと言わないで遊びに行こうぜ」

「やめてください」

「そのへんにしたら」

「なんだてめぇ？」

「通りすがりの一般人Ａでーす」
「なめてんじゃねーぞ」
一人の男が殴りかかってきた。
「はぁー」
俺はため息をついた。男のパンチを避けて、男の顔面にパンチした。
あ、やっちまったぜ。
「ちくしょー！！　覚えてろよ！！」
男３人は逃げた。
ザコキャラが吐くセリフをどうも。
「ありがとうございました」
「いいってことだ。んじゃ」
「待ってください。何かお礼させてください
」
「いいよ別に」
「いえ、させてください」
何回言っても同じ答えしか返ってこないような気がする…。じゃあ…
「買い物付き合ってくれない？」

「いいですよ。私も行くところだったんですよ」

助けた女の子と一緒に買い物に行くことになった。なんか、俺がナンパしたみたいになってない？

「あの…私七咲逢っていいます」

「俺は加藤悠人。よろしくね。呼ぶ時は下の名前で呼んで。加藤だと呼ばれ慣れてなくて」

「そうですか。わかりました、悠人さん」

この笑顔めっちゃかわいいなー。

「何私の顔ジロジロ見てるんですか？」

なんか初めて会った女性にだいたい言われるような…。そんなに見てるかな？

「かわいいなーって思ってつい」

「か、かわいい？／／／　初対面の人にいきなりいうことですか／／／」

「いいじゃん別に。実際そうだし」

「／／／／」

お、照れた。顔が赤い七咲もかわいいなー。
そんなこんなで、一緒に買い物した。

「今日は本当にありがとうございました」

「こっちこそ買い物付き合ってくれてありがとう、七咲」

「それじゃあ、また会いましょうね」

「ああ」

七咲と別れた。買い物も終わったし、家に帰るかー。
あ、七咲のメアド聞くの忘れた…。
まあ、また会えると思うからいいか。

～七咲逢ｓｉｄｅ～

不良に絡まれたときは本当にどうしようかと思った。けど加藤悠人さんっていう人に助けてもらった。いい人だなーって思った。
にしても、会っていきなりの人にかわいいと言われて正直私少し嬉しかった。けっこう顔もイケメンだったかも…。メアド聞こうとしたけど、緊張して聞けなかった。本当に何してるんだろ私。
悠人さんの制服、輝日東高校だったはず…。

輝日東高校かー。そこ受験してみようかな。

～加藤悠人ｓｉｄｅ～

今俺はアニメを見ています。
何かはまあ、ご想像で。
今日も不良から助けたなー。
いやー、疲れた。

第3話　先輩と小テストと生徒会と…（後書き）

基本女の子の一人称は『私』でいきたいと思います。（美也ちゃん以外）
橋本結衣ですが、あんまり登場しません。
オリキャラの設定はまた会える後ほどにー。
感想お待ちしてます。

オリキャラ設定（前書き）

オリキャラの設定です。

オリキャラ設定

※ネタバレかなりあります

名前　橋本　結衣（ゆい）
クラス　３年Ａ組
誕生日　３月２日
身長　１５７ｃｍ
髪型　髪の長さは肩ぐらい。髪の色は黒
役職　生徒副会長
胸　中の上

名前　五十嵐　辰巳
職業　輝日東高校校長
年齢　６３歳

好きなもの　お宝本　お宝ＤＶＤ
加藤家と親戚の関係。詳細は不明。

名前　加藤　由紀（ゆき）
誕生日　９月７日
髪型　ボブヘアー　たまに結んだりする
身長　１５２ｃｍ
胸　中の下
学力　中ぐらい　英語はかなりできる
趣味　ギター　ベース（兄より上手）
好きなもの　ケーキ　兄？
嫌いなもの　ホラー系
兄より１歳年下の妹。現在は両親と一緒にアメリカに住んでいる。

名前　加藤　祐二
年齢　３６歳
髪型　よく変わる（例：金髪、茶髪）
身長　１８０ｃｍ
職業　アーティスト、たまに芸能界
顔　イケメン（悠人はそうはおもっていない）
学歴　某有名私立大学（〇稲田）中退
アメリカに行く必要はなかったけど、母親にべったりなため、一緒に行った。
最近は音楽活動をしていない。若くして結婚した。家事等もできる。

名前　加藤　恵理
年齢　３６歳

髪型　ショート　茶髪
身長　１５５？
顔　童顔（由紀と姉妹に間違われるくらい）
学歴　某有名私立大学（〇稲田）卒業
職業　ＩＴ関係
祐二とは高校のときに知り合って大学生で結婚。
あまり家事は得意ではない。

オリキャラ設定（後書き）

今後はサブキャラを結構絡ませていきたいなぁーと思います。最終的にどうなるかは正直自分でもまだわかりません。七咲にしようかなーとは思ってるんですけど…。

こんな作者ですみません…ｏｒｚ

第４話　誕生日会（前書き）

遅れてすみません。
今回は（も？）サブキャラとの絡みが多いです。
キャラ崩壊もけっこうしてるかもしれません。
あと私のマイブームはコンビニのグレープフルーツジュースです（笑

第４話　誕生日会

俺は今、学校の屋上でのんびりしています。１時間目は昨日やった英語だからまあいいかと思い、ついサボってしまいました。生徒会長なのにいいのかだって？　ノープロブレムですよ。

俺は朝にコンビニで買ったグレープフルーツジュースを飲んでいた。今グレープフルーツジュースにはまっているんですよ。

のんびりしてたら、１時間目が終わった。
２時間目は…日本史かー。確か先生は麻耶ちゃんかー。やばいな。
けど場所わかんないと思うから問題ないかー。

その頃教室

麻「じゃあ授業始めるわよ…って加藤君は？」

薫「１時間目からいませんでしたよ。どうせ屋上でサボってんじゃないの？」

梅「学校始まってすぐにサボるとは…さすがユウだぜ」

麻「……連れてきます！！　皆さんは少しの間自習しててください」

梅「終わったな、ユウ」

橘「そだね」

屋上

俺はにしても天気がいいなー。なんだか眠くなってきた。

すると突然、屋上の出入り口の扉がバンって音がして開いた。

「加藤君。見つけたわよ」

「ゲッ、麻耶ちゃん…。なんでここに…！？　授業は！？」

「あなたを連れにわざわざ自習にしてきたのよ。何生徒会長がサボっているのよ！！　早く来なさい！！！！」

「ちくしょー！！！！」

麻耶ちゃんに襟をつかまれ、ずるずる引きずられながら連行された。

「ちょっと麻耶ちゃん！！　ケツが焼ける！！！！　自分で歩くから！！！」

「信用できないわ」

…教室に連行されました。

１－Ａ教室

俺は引きずられたまま教室に入った。
みんなに笑われた。屈辱だ…。

「さて…授業を始めるわよ」

「くそ…」

俺は席についた。

「だるい…」

「がんばろ」

「うん…ありがとう」

恵子が微笑みながら言った。その微笑みかわいいなー。

２時間目終了

「次は…化学か…」

「何うかない顔してるのよ」
「どうしたの？」
「薫と恵子か…。いやー、実は……ケツがヒリヒリして」
「何言ってるのよ／／／／」
「ぐはっ！！！」
俺は薫に顔面をグーで殴られた。
俺は椅子から落ちて、仰向けになった。
「イッテー！！。あ……」
俺は
今仰向けになってるため、立ってる二人のスカートの中が丸見えだった。
「なに見てるのよ／／／／」
「ぐはっ…」
薫に思いっきり蹴られた。
２人とも顔が真っ赤だった。
でもこれは俺は悪くない。けど見えてラッキーだと一応思いました。

３時間目

「化学の木原です。よろしく」

３０代半ばくらいの男性だった。

「これから小テストをしたいと思います」

木ィィィ原くゥゥゥゥゥゥゥゥゥン！！！

……すみません。少し取り乱しました。

元素記号の小テストだった。

水兵リーベ僕の船……

これを覚えてたら余裕ですよね。けどこれ以外にも覚え方はあるそうですよ。興味あればググってみてください。ここで言えることではないので…

……何言ってるんだろ俺。

３時間目終了

ブルルル…

俺の携帯が振動した。

メールだ…

今『逃〇中』風に言ってみました。

香苗からだった。

「『今日一緒にお昼食べよ』か。場所は屋上か。了解っと」

メールを送信した。

そして昼休み

俺は屋上へ行った。

「オッス」

「あ、悠人君」

「あれ、1人？」

「う、うん」

「てっきり梨穂子も一緒にいるかと思ったよ」

グレープジュースを飲みながら言った。

「悠人君お弁当じゃないんだ…」

「弁当の時もあるけど、毎日は面倒だから」

「ふ、ふーん…」

なんかいつもの香苗より少しおとなしい。

「そういやなんで急に俺と昼飯を食べようと？」

「そ、それは…、一緒に食べたかったから／／／」

「そっか。クラス違うしな」

今俺と香苗は屋上の柵に寄り掛かって、一緒に座っている。
女子と2人っきりで昼飯を食べることなんて滅多にないだろう。
ちなみに屋上には俺たち2人しかいない。
若干緊張しています。

「そういえば今日って何日？」

「4月11日だよ。それがどうかしたの？」

「実は13日が梨穂子の誕生日で…。そうか、あと2日しかないのか…」

そう、13日は梨穂子の誕生日である。

「へぇー、そうなんだ。まだ仲良くなってすぐだったからわからなかったよ。何かプレゼントでもあげようかな」

「そのことだけど…、13日にまあ、親睦（しんぼく）を深めることも含めて、誕生日会でもしない？」

「うん、いいけど…準備1人でやるの？」

「あ……、手伝ってもらっていい？」

「うん。いいよ」

「じゃあ放課後俺の家に来て。どうするか決めよう」

「う、うん」

こうして放課後に香苗と誕生日会の計画をすることになった。

ん、よく考えたら女子を家に招くなんて久しぶりだなー。まあ、別にどうでもいいけど。

放課後

今俺と香苗は俺の家に向かっています。

「なあ香苗」

「……」

「おーい」

「…え、何？」

「どうした？　ぼーとして。少し顔が赤いけど」

「いや、別に／／／」

「そうか」

「（男の子の家に行くんだから緊張するに決まってるでしょ！！）」

途中歩いていると、薫と恵子がいた。

「おっす薫、恵子」

「よっ、ユウ、伊藤さん」

「香苗でいいわよ」

「じゃあ私も薫でいいわよ」

「えっと…彼女は」

「そっか。２人は初めて会うんかー」

「田中恵子です」

「伊藤香苗だよ。よろしくね」
「そういえば2人で何してたの？　まさかデート？」
「な、ちげーよ／／／」
「そんなわけないでしょ／／／」
「ほんとにぃ？」
薫が超ニヤニヤしながら聞いてきた。
「じーー」
恵子が俺のことを睨んできた。
だから違うって…
「えっと実は…」
俺は梨穂子の誕生日会について2人に説明した。
「なるほどね。桜井さんの誕生日会ねー」
「んで2人にも協力してほしいんだ」
「わかったわ」
「うん、いいよ」

2人からOKをもらった。

「んでこれから俺ん家にいくんだけど2人とも来てくれない？」

「ごめん私これからバイトなんだー。明日、明後日は空けとくから」

「そうか…、わかった。恵子はどう？」

「私は…いいよ」

この後、薫はバイトへ行き、俺、香苗、恵子は俺の家へ向かった。

そして、俺の家

「おじゃましまーす」

「おじゃまします」

とりあえず俺の部屋に行った。ちなみに2階に俺の部屋があります。

「へえー、けっこうかたずいてるね。うわ！！　ギターがある！！
ギターやってるんだー」

「すごいね」

「いやー。あ、ちょっくら飲み物取ってくる」

「うん」

「ありがとう」

俺は部屋を出て、飲み物を取りに行った。

「ん？　ベットの下に何かある」

「なんだろうね」

「ちょっと見てみよう」

「だめだよ香苗。勝手に見ちゃ」

「まあまあいいじゃない……、あ……」

俺は飲み物を持って部屋に戻った。
すると2人は何かの本を見ていた。

「なにを見て…ってそれはー！！」

2人は俺のお宝本、俗に言うエロ本を見ていた。

「え…その…悠人君もこういう本みるんだね／／／」

「……／／／」

「やめてくれー！！」

「悠人君、ＳＭとか好きなんだ…」

「そういうわけじゃない！！」

どうやらＳＭ系の本を読んでたらしい。もちろんそういう趣味とかじゃないからね。なんというか…一種でき心です…はい…。

「……悠人君はこういう縛られた女性とか見てその……興奮するの？」

…恵子が恥ずかしそうに言った。

「いや、だからそういうんじゃないんだからね！！　まあそういうのもあるかもしれないけど…」

「私でよければ……縛っていいよ…／／／」

「ちょ…、何言ってるんだ！？」

「うわ、恵子結構大胆だね。…わ、私も別にいいよ／／／」

「もうやめてくれーー！！！」

かなりの屈辱だ…

「もう本題に入るぞ」

「……／／／」

「……／／／」

「もう勘弁してくれ…」

俺たちは誕生日会について話し合いをした。
参加できそうな人を1人1人電話をしていった。
参加するのは
俺
梨穂子
純一
薫
恵子
香苗
美也ちゃん
である。
マサは家の手伝いとか何とかで断られた。
ちなみに、ドッキリにしようかなと思います。

「案外早く決まったわね」

「うん」

「そうだな。明日は純一や薫と一緒に決めていこう」

「うん」

「まだ時間あるし…、そうだ！　ねえ、ギター弾いてみて」

「私も聞きたい」

「まあ、いいけど…。エレキよりアコースティックの方がいいか」

俺は、アコースティックギターでジブリの曲などを弾いた。

「すごい！！　悠人君にこんな特技があったなんて…」

「少し感動しちゃった…」

「ありがとう。父親から習ったんだ」

「そういえば両親はどこにいるの？」

「親は…今ここにはいない…」

俺は少し悲しげに言ってみた。

「あ、聞いてごめん」

「悠人君の親って…」

「俺の親は……今海外にいるんだ」

「「え…」」

「騙された？」
「私悠人君の親死んじゃってるかと思ったよ」
「私も」
「ちょっと2人にいじわるしてみましたー」
「やられたわ」
「うん」
「今俺の親と妹がアメリカに住んでるんだよ」
「じゃあ今1人暮らしなんだー」
「そゆこと」
そんなこんなでしばらく雑談をした。

「それじゃあそろそろ帰るわね」
「私も帰るわ」
「送ろうか？」
「いいよ別に」

「もう外は暗いし…」

「……じゃあお願いしていい？」

「私からもお願いします」

「おう」

こうして2人を送った。

次の日の放課後

現在、俺の部屋に純一、薫、香苗、恵子、美也ちゃんがいます。けっこう大人数です。

「この人の妹の橘美也です」

「この人ってなんだよ！！」

「よろしくね、美也ちゃん」

「よろしくねー」

「よろしくお願いします」

「恵子、相手は一個したの中3だぞ…。敬語は使わなくていいんだぞ」

「にしても凄いわねー。ギターが何本も」

「ギターは今はどうでもいい。それで…」

誕生会の話し合いをした。

「香苗が俺たちの準備をしてる間、梨穂子を適当に足止めしといて」

「わかったわ」

準備と言っても、料理作るくらいだけど。

話し合いも終わって、みんなはプレゼントを買いに帰った。

「ねえ、ユウ、梨穂子にどんなのあげればいいと思う？」

「お前があげたプレゼントは何でも喜ぶと思うぞ」

「そうだ、それにお前と梨穂子は幼馴染だろ」

「ユウだってそうじゃん」
「俺より付き合い長いだろ」
「そうだけど…」
「まあ、頑張れ」
「…うん。ありがとう」
「自分のセンスを信じろ」
純一もプレゼントを買いに行った。
さて、俺もやるか。
何をやるかって？
そりゃあまずは買い物行かなくちゃならないだろ。
俺はＳ○ＩＹＵへ向かった。

「えーと…、まずは…」
俺は今、Ｓ○ＩＹＵに来ています。
俺が誕生日会に必要な食材を探していると、肩を叩かれた。
「ん？」
「こんにちは、悠人さん」

「お、七咲かー」
「お買い物ですか？」
「うん、七咲もか？」
「はい。あの、悠人さん、…いっしょにお買いものしませんか？」
「いいよ」
こうして、七咲といっしょに買い物をすることになった。

「悠人さん、けっこう買いますね」
「俺の友達の誕生日会に使うんだよ。ざっと7人前だよ」
「悠人さん料理できるんですか？」
「まあ、一応。俺1人暮らしだし」
「そうなんですか」
「七咲も料理すんの？」
「はい、両親が共働きでさらに、弟がいますから」
「そうなんだ。七咲は偉いなー」

俺は七咲の頭を撫でた。

「何するんですか／／／」

「褒めたんだよ」

「褒められたことは別にしてません」

「お前にとってはそうかもしれないけど、世間はお前のことをすごいと思うぞ。だから俺が代表で褒めてやる」

そう言ってもう1度七咲の頭を撫でた。

「あ、ありがとうございます／／／」

七咲の顔が赤い。照れてるな。

「七咲の照れた顔かわいいなー」

「か、からかわないでください！！／／／」

「からかってないよ」

「そ、そうですか…／／／」

そんなこんなで買い物をし終えた。

「じゃあ、悠人さん、ここで」

「うん、じゃあね」

こうして七咲と別れた。
今回はメアドをちゃんともらっといた。

次の日の放課後

加藤家

「ちゃっちゃと作っちゃいますか」

「おーー」（香苗以外の一同）

まあ、準備は省略。

そして準備完了。
楽してる漢字がするけど実際は大変だったんだからね。
現在１８時である。

俺は香苗に電話した。

「香苗、準備できたぜ」

「了解ー」

おとは梨穂子を待つだけか。

ピンポーン

来たか。

「誕生日おめでとう」（一同）

「え、あ、ありがとう！！」

「さあさあ、中に入って」

こうしてリビングへ向かった。

「改めておめでとう、梨穂子」

「おめでとう」（俺以外の一同）

「ありがとう、みんな」

「それじゃあ、さっそくプレゼントを」

みんなはプレゼントを渡した。

ちなみに俺は…

「ごめん、梨穂子。食材買う金でプレゼントの代金が…」

「ううん、悠人はこんなすごい料理作ってくれたじゃん」

「ありがとう」

この後俺たちは食事をし、みんなでＷｉｉで遊びました。

誕生日会やってよかったー。

第４話　誕生日会（後書き）

最後グダグダで本当にすみません。

ちなみに女性キャラの一人称は基本『私』でいきたいと思います。

第5話　球技大会？（前書き）

遅れてすみません。
最近忙しくて…。
誤字脱字がございましたら、ご指摘の方をよろしくお願いします。
……カタッ苦しいなぁー。

第5話　球技大会？

みなさん、こんにちは。現在、放課後です。俺は今、たいへんめんどくさい生徒会議というものをしています。
逃げようとしましたが、見事麻耶ちゃんによって捕まりました。
いるのは、俺、副会長、体育委員長、体育委員2名、保健委員長、体育教師、麻耶ちゃんである。なんで麻耶ちゃんがいるんだよ…。

「えーと、今回は……。何だっけ？　橋本先輩」

「もう。今回は来週行われる球技大会についてです」

この学校は運動会というものがなく、そのかわり球技大会がある。

「んじゃまずは…、てかそもそも球技大会ってその…どういった感じなんですか？　俺はここにねじ込まれた1年生なんで…」

「球技大会は男女別でクラス対抗で種目数は2、3個くらいよ」

「んじゃまずはその種目を決めましょう。じゃあ適当に意見を」

「はい」

「どうぞ」

体育委員長が手を挙げた。

「妥当に男子はサッカーでいいんじゃないんでしょうか？」

「サッカーね。麻耶ちゃんよろしくー」
「麻耶ちゃんっていうのやめなさい！」
そういいながら麻耶ちゃんはボードに種目名を書いた。
「はい」
今度は体育委員（女）が手を挙げた。
「女子はドッジボールがいいと思います」
「ドッジボールですね」
まあ、そんな感じで種目を決めていった。

「男子はサッカー、バスケ、女子はドッジボール、バレー、バスケで。異議はないですよね？　……ないようなんでこれで決定です」
女子の方が種目数多い理由は、単純に女子の方が人数多いからです。
「次は……先輩…」
「まったく…。次は怪我人がでたときですけど…」

まったく面白くないので俺は欠伸(あくび)しながら聞き流していた。
なのでカットしちゃいます。

「それじゃあ…今日は終わりでいいですか？　先生方」

「今日は終わりで結構です」

体育教師が言った。

よっしゃー！！　終わったぜ！！

俺は帰宅の準備をし、帰ろうとした。

下駄箱のところを出て、近くの椅子（木が植えてある塀）に恵子が座っていた。

「悠人君」

「あ、恵子」

なんで恵子が？　部活でもしてたのかなー。でも入部した話なんて一度もきいてないな。

「もしかして俺のこと待ってた？」

「う、うん」

「え、ありがとう」

ちょっと照れてしまった。恵子が俺のことわざわざ待っててくれるなんて…。

「なんで俺のことわざわざ待っててくれたの？」

「……一緒に帰りたかったから／／／　……迷惑だった？」

「そんなことないよ！！　嬉しいよ！！」

「ありがとう／／／」

恵子と一緒に帰ることになった。
女子と2人っきりで下校なんて…。それに恵子から誘ってくれた…。
これはもう男子にとっては幸せすぎる！！

俺と恵子は坂の道を下校中です。

「俺のことずっと待ってたの？　俺生徒会の会議だったのに…」

「知ってたよ。橘君に聞いた」

「ごめん。なんかずっと待たせちゃったみたいで」

「いいの。私が勝手にやったことだし…」

「でもすごい嬉しかったよ」

「あ、ありがとう／／／」

恵子が照れながら言った。やっぱ女子の照れた顔がかわいいなー。
いや、決して変態ではありません！！

「ねえ、生徒会会議で何話してたんの」

「球技大会についてだよ」

「そういえば球技大会来週にあったね。でも私運動苦手だから、ちょっとイヤかな…」

「確か女子は…ドッジボール、バレー、バスケだったかな。今度クラスでどの種目をやるか決めるから」

「悠人君って運動得意？」

「体動かすのは好きだよ」

「そうなんだ」

「運動苦手なら今度一緒に球技大会のために向けての練習でもするか？」

「いいの？」

「ああ」

「ありがとう」

こんなことを話していると、コンビニの前を通ろうとしていた。

「ファミマによっててもいい？」

「うん、いいよ」

俺たちはファミマに入った。ファミマに入るときのあの音楽、俺なりにけっこう好きかな。

「何か奢ってやるよ」

「そんな…悪いよ」

「今日待っててくれたお礼だ」

「…ありがとう」

「何がいい？」

「何でもいいよ」

「じゃあ…アイスでいい？」

「うん」

俺はスーパーカップの抹茶味、恵子はバニラ味を購入した。

コンビニを出た。またあの音楽が鳴った。何回も聞かされるとさすがに嫌になる…。

ゴミがでるのが嫌だからファミマの前で食べることにした。

「おいしい？」

「うん。おいしい。悠人君は」

「うん。おいしい。……ねえ、ちょっともらっていい？」

「…うん。いいよ。（そうだ！）」

「ありがとう」

「はい、どうぞ♪」

「え…」

恵子のスプーンで恵子のバニラアイスをすくい、俺に差し出してきた。俗に言うアーンってやつだ。確かに恵子のアイスちょうだいと言ったけど…。

「いや…それは恋人がするものだぞ！！」

「……（なんで気付かないのかな）」

恵子が少し悲しげな顔をした。そんな顔しないでくれ…。

「……わかったよ」

「ほんとに！？」

「ああ…」

めっちゃ恥ずかしいけど…

「じゃあ…あーん」

俺は恵子にバニラアイスをあーんしてもらった。本当に恥ずかしい。

そんなこんなでアイスを食べ終え、コンビニを後にした。

「無理なお願いしてごめんね」

「いや、いいよ別に」

まあ、若干うれしかったけど…。

「それじゃあ俺はこっちだから」

「うん、奢ってくれてありがとう」

「こっちこそ、俺の帰り待っててくれてありがとう、じゃあね」

「バイバイ」

恵子と別れた。俺は家へ帰った。

翌日

学校

「えーと…言うの面倒いんで…絢辻さん、あとはよろしく！！」
俺は絢辻に任せ、席に戻った。
「全くもう…、これから球技大会で何の球技に参加するかを決めたいと思います」
「ねえ、ユウ。何のする？」
純一が話しかけてきた。
「出来れば全てに出たい！！」
「お！！　流石ユウだぜ！！」
マサも会話に参加してきた。
「無理だろ」
「2つ参加しちゃダメなの？」
「さあ」
「麻耶ちゃーん、参加出来るのは1つだけ？」
「麻耶ちゃんと呼ぶのはやめなさい！！　これで何回目よ……。まあ、別にそんなルールはないけど…」
「じゃあ両方やる」

「マジかよ…」

「流石だぜ！！」

このクラス男子１８名で参加出来るのは１６名、まあ、普通交代しながらやっていくからな。サッカーは補欠に入っといた。純一とマサはサッカーになった。

～恵子ｓｉｄｅ～

うーん、どうしよう。やっぱりドッジボールが一番簡単かな…。

「恵子ー。何やるか決めた？」

薫が話しかけてきた。

「ドッジボールにしようかな…」

「私もドッジボールよかったけど、何だか人気あってみんなドッジボールにしちゃってるし。…ねえ、一緒にバスケにしない？」

「え！？　バスケットなんて無理だよ」

「大丈夫だって」

私は薫に無理矢理バスケットにされてしまった。どうしよう…。あ、悠人君に教えてもらおう。ちょうど悠人君もバスケやるみたい

だし…。　楽しみ。

～悠人ｓｉｄｅ～

学校が終わり、俺は帰宅した。
俺は今、一応勉強をしている。俺はちゃんと宿題をやる偉い人なのだ。……調子に乗ってすみませんでした。

ブルルル…

机に置いてあった携帯が振動した。

恵子からのメールだった。

『なになに…、球技大会がバスケットになったから今度バスケット教えてね』か。
恵子バスケになったのか。今週の日曜でいいかな。

俺は恵子にメールを送信しといた。

それじゃあ、宿題の続きをするか。……やっぱギター弾こう。

そして今週の日曜　朝９：００

おい、作者。とばしすぎじゃね。まあ、いいや。

俺は家にあったバスケットボール（たまたまありました）を持って、待ち合わせ場所である純一の家に向かった。今回来るのは、恵子、薫、純一になりました。

橘家到着。

ピンポーン

俺はインターホンを鳴らした。

「純一君。あーそーぼー」

「小学生か！！」

「やっほー、悠人」
「おはよう、悠人君」
「2人も来てたのか」
「あんたが一番最後よ」
「時間どおりのはずだったんだが…」
「まあまあ、じゃあさっそく行こうか」
「おう」

俺たちは、少し遠いバスケットコートがある公園へ向かった。

そして、到着。　早いなオイッ！！

現在１０：３０

「着いたー！！」
「バスケットコートは…空いてるな」

「じゃあ、さっそくやろうか」
「純一、あんたサッカーなのにやる気満々だね」
「僕の運動神経のよさをここで教えてあげるよ」
「純一、ナルシストみたいだぞ」
「僕はナルシストなんかじゃないよ！！」
「はいはい、じゃあやるか」

俺たちはバスケの練習をし始めた。

「とりあえず……何するか」
「ユウ、何にも考えてなかったの！？」
「なんだよ純一！！　文句あるならじゃあ純一が教えろよ」
「人に押し付けるなよ！！」
「はあ…、薫、恵子、何を練習したい？」
「じゃあシュートでいい？」
「わかった。シュートは大きく二つに分けてジャンプシュートとレ

イアップがあるんだけど。まずは一番簡単に入りやすいレイアップから練習するか。じゃあ純一、やってみて」

「だから人に押し付けるなよ！！　僕バスケ経験０だからそんな正式名称言われてもできないよ」

「ったくよう。レイアップは…」

俺はゴールに向かってドリブルしながら走った。レイアップをした。

「すごーい」

「すごいじゃん」

「まあ、こんな感じだ。わかったか？　純一」

「そのぐらい僕だってできるよ」

「薫、恵子、純一が俺より上手なお手本を見せてくれるらしいぞ」

「あら、楽しみね。期待してるわよ」

「橘君もできるんだー」

「う、うん」

こりゃできないな。

……お、意外と出来てるな。ゴールに入んなかったけど、様にはなってたな。

「どうだった、ユウ？」

「まあまあだな、たぶん」

「たぶんってなんだよ」

「俺だってバスケ経験ほぼ０だぞ」

「そうなんだ。私かなり経験者かと思ったわよ」

「私も」

「だからあんまり期待しないでくれよ。じゃあさっそく…薫からやってみて」

「よしっ。やってやるわ」

……お、流石薫だな。けっこう出来てる。

「なかなかすごいな」

「どんなもんだい」

「純一よりは出来てた」

「ぐぬぬ…」

「悔しい？」

「いいさ、僕はどうせサッカーだから」

純一が開き直った。

「……次は恵子」

「……」

「大丈夫だ。できなくても俺がしっかりと教えてやるよ」

そういって恵子にバスケットボールをパスした。

「…うん。がんばってみる」

……確かにあんまりできてなかったけど、そこまでひどくはなかった。

しばらく恵子にレイアップを教えた。

「はあはあ…」

「休憩するか？」

「もう少しだけ…」

「…そうか」

恵子は諦めずに頑張っていた。

純一と薫は向かい側のゴールで練習をしている。今はそんなことどうでもいい。

「ゴールのあの四角いところの角を狙うと入りやすいよ」

「うん…。やってみるよ…」

恵子はレイアップをした。

……入った。

「入ったー！！」

「凄いよ、恵子！！」

「悠人君のおかげだよ」

「恵子が諦めずに頑張ったからだよ」

両手ハイタッチしながら会話をしていた。

「2人ともお熱いねー」

「2人ともそんなに仲がよかったんだね」

薫と純一がニヤニヤしながら言ってきた。
うわーー！！！　めっちゃ恥ずかしい。

「ちがーーう！！　俺は恵子がゴールを決めたことに喜んでいたんだ！！　なあ恵子」

「／／／／」

「あのー…」

「ラブラブね」

「そうだね」

「だからちがーう！！」

2人に散々からかわれた。

只今休憩中です。

「じゃあ昼飯にするか」

「けっこう運動したわねー」

「うん」

因みにみんなにお昼は持って来なくていいと言ってある。

「実はみんなによい知らせがあります」

「「「？」」」

「なんと…俺が弁当を作って来ましたー」

「またまた…。冗談を…」

「これが証拠です」

俺は弁当箱を出した。

「すごーい！！」

「やるじゃん」

「すごいな」

「みんな、じゃんじゃん食べてくれ」

「「「いただきます」」」

4人で楽しく昼食をとりました。

午後も練習に取り組みました。

今俺はベンチでアクエリを飲みながら休んでいた。

「ハロー」

「お、薫」

「隣いい？」

「ああ」

薫が隣に座ってきた。

「ユウって運動得意だったんっだー」
「知らなかったっけ？」
「だって私たち知り合ったのが中3くらいだったじゃない」
「1年一緒にいればわかるだろ」
「アンタあんまり授業出てなかったじゃない」
「そうだっけ？」
「そうよ」
確かに俺はサボりまくってた。
「……」
「……あれ、どうしたの？　ちょっと悲しそうな顔をしてたけど…」
「いや、なんでもない」
「それにしてもアンタ恵子とあんなに仲がよかったとはね～」
「だから違うって…」
「本当に？」

「本当」

「本当の本当に？」

「男に二言はない！！」

「…そう」

「どうした？　急に安心したような顔をして？」

「な、なんでもないわよ／／／」

あ、行ってしまった…。

どうしたんだろ。

まあ、いっか。俺も練習しよう。

午後3時半

「そろそろ帰るか」

「そうね」

「いやー、疲れたー」

「今日はみんなお疲れー」
「悠人君もお疲れ様」
「ありがとう、恵子」
「ユウ、お疲れー」
「おう、ありがとう、薫」
「お疲れ、ユウ」
「純一に言われても嬉しくない」
「なんだとー」
「冗談だ」

こうして楽しい楽しい1日が終わったのである。
ジャジャーン。

第5話　球技大会？（後書き）

作者「いやー、皆様本当に遅れてすみませんでした」

加藤「全くそうだよ」

作「あ、リア充」

加「リア充じゃねえよ」

作「あんなに女子にちやほやされて…」

加「お前が書いた作品だろ」

作「チッ…。あ、あと皆様の御感想の方をお待ちしておりますので」

加「よろしくお願いします」

作「それじゃあ…」

作・加「「次回をお楽しみにー」」

第6話　球技大会？（前書き）

皆様明けましておめでとうございます。
そして投稿遅れて申し訳ございません。
グダグダ感たくさんありますけど、よろしくお願いします。
あと誤字脱字がございましたら、言ってください。

第6話　球技大会？

みなさんこんにちは。こっちの世界ではおはようございますですけど。

今日はとうとう球技大会本番です。
気合いれていきますか。

朝食を食べ、学校へ向かった。

歩いていると、香苗が前を歩いていた。

「おっす、香苗」

「おはよう、悠人君」

「一緒に行こうぜ」

「うん」

香苗と一緒に登校することになった。

「悠人君って球技大会何にでるの？」
「俺はいろいろ。まあ、全部」
「へえー。すごいね」
「香苗は？」
「私は桜井とバレーボールにでるよ」
「そうか」
「応援しに来てくれる？」
「敵チームだぞ」
「ダメ？」
「……見には行くよ」
「応援は？」
「だから敵チームだろ」
「ダメ？」
「……心の中では応援するよ」
「ありがとう」

そんな会話をしていたら、学校へ着いた。

１－Ａ教室

「おっす、ユウ」

「おはよう、ユウ」

「おっはー、マサ、純一」

純一とマサだ。２人ともすでに運動着に着替えていた。

「早く着替えて行こうぜ」

「おう」

着替えてグランド（校庭）へ向かった。
そこでものすごくだるい開会式が行われた。俺は生徒会長でもあるので、あいさつ的なものをされた。生徒会長というのは辛いものだ。

そんなこんなで開会式が終わった。

「最初は……いきなりサッカーか」

「対戦相手は…１－Ｂか」

「まあ、がんばろうよ」

「そうだな」

そして、１－Ｂと試合をした。２－０で勝ちました。２点とも俺が決めました。決して調子には乗っていません。

「楽勝だったな」

「そうだね」

「俺はけっこう疲れた」

「ユウはがんばったからね」

「３人ともお疲れー」

「お疲れ様」

薫と恵子が来た。

「ありがとう」

「次女子のバスケがあるから3人とも応援よろしくね」

「おう」

「わかったよ」

「了解」

「それじゃあ、早速レッツゴー！！」

「あ、俺ちょっと便所に行ってくる」

「先に行ってるぞ」

「おう」

俺は便所へ行った。

俺は便所で用をたした。

「スッキリしたー」

俺は便所から出た。

「あれ？　確か君は…悠人君かー」

「どもー。森島先輩。ここで何してたんですか？」

「響がトイレに行ったから待ってたの」

「そうですか」

噂をすれば塚原先輩が戻ってきた。

「お待たせ…　ってあら、悠人君」

「どうもっす」

「そういえばさっきのサッカーの試合かっこよかったわよ」

「いえいえ、別にそんなことは」

「すごくかっこよかったよー」

おおっ！！　こんな美女二人からかっこいいとか言われるなんて…。
嬉しすぎる。

「いやー／／／」

多分今かなりデレデレになってるだろう。

「じゃあ、俺そろそろ行きますね」

「え～。もっと一緒におしゃべりしようよ」

「コラ、はるか。悠人君だって忙しんだから」

「今度一緒におしゃべりしましょう」

「絶対だよ…」

「わかってます」

今の森島先輩の顔めっちゃ可愛かったー。
……きもいですね、はい、すみません。

体育館へ向かった。

体育館

さて、純一たちはどこに…

「おーい、ユウ。こっちだ」

マサに呼ばれた。

「もうすぐで始まるみたいだよ」

「そうか」

「ねえ、悠人君」

こっちに女の人が来た。橋本先輩だ。

「何ですか。橋本先輩？」

どうせ厄介ごとだろうけど…。

「バスケットの試合の審判をして「おことわりです」何でー？」

「面倒だからです」

「いいからやる」

笛を渡され、先輩は行ってしまった。
そして純一とマサは多分先輩のことに見惚れているだろう。実際かわいいけど…。ちょっと真面目すぎるかなー。

「面倒だ…」

「おい、ユウ。あの美人とはどんな関係だ！？」

「知らねえのかよ。彼女は生徒会の副会長だ」

「へえーあんなに美人とは……」

「おーい、純一。変な妄想すんな」

「してないよ」

「嘘をつくな。変態紳士！！」

「変態紳士って何だよ！！」

「お前のことに決まってるだろ！！」

「何で僕が変態紳士呼ばわりされなくちゃならないんだよ」

「紳士をつけただけマシだろ！」

「余計変態が際どくなるよ」

「まあまあ、ほら、俺らのクラスのバスケの試合始まるぞ。ユウは早く審判しに行ってこい」

「へーい」

マサに言われ、審判しに行った。因みに俺らのクラスのバスケの試合を審判することになってます。

そして、試合が開始された。今１－Ａで出ているのが、薫に恵子、その他３名である。応援したいのは山々だが、俺は審判だから中立の立場でいなくてはならない。そこが辛いなー。

しばらくたった。今、１８－２２で相手チーム（因みに１－Ｃ）が勝っている。

がんばれといいたいが俺は審判だから口で応援することができない。恵子は特にがんばってたからなー。

お、薫がシュートを決めた。教えたかいがあったなー。

試合は終盤を迎えた。４０－３８で若干勝っている。でも油断はできないな。

ん？　少し恵子の顔色が悪いような気がする。でも止めることができない。残りあと5分…。はやく終わってくれ…。

そして、試合は終了した。結果は４０－４１で最後スリーポイントを入れられ、負けてしまった。でも、薫も恵子もよくがんばった。

「恵子よくがんばったわね。おつかれ」

「うん。ありがと…」

「ちょっと、恵子！？」

恵子が倒れた。俺が思ってた最悪の事態が起きた。俺は恵子のところへ駆け寄った。

「おい、恵子、大丈夫か！？」

「ユウ！　恵子が…」

「熱中症だな…。今日けっこう暑かったし。少し無理をさせてしまった…。」

俺は恵子をおんぶした。

「俺が保健室に連れていく」

「頼んだわよ」

「ああ」

こうして、保健室へ向かった。

保健室

「失礼します」

あれ？　誰もいない。
そうか、先生は外で救護とかしてるのか。
…少し暑いから勝手にクーラーつけよう。基本生徒がつけちゃ駄目だけど…、これは緊急事態だ。問題ないはずだ。

俺は恵子をベットに寝かせ、タオルを水でぬらし、額の上にのせた。
そして、恵子が目を覚めるまで待っていた。

ん！？　よくよく考えたら今２人っきりじゃないか。……まあどうでもいいか。

「ん…」

「お、目が覚めたか？」

「あれ、私は確か…倒れて」

「実はあれからかれこれ３日が経って…」

「え！？　そんなに寝てたの！？」

あ、信じちゃった。

「すみません。実質１５分程度しか経っていません」

「驚かさないでよ」

「すんまへん」

まさか信じると思わなかった。

「悠人君が運んでくれたの？」

「うん、まあ」

「重くなかった？」

「全然。たぶん普通くらいだった」

「どうやって運んだの？」

「おんぶ」

「そう、ありがとう」

なんか少し素っ気ないなー。
すこしからかってみよう。

「もしかしてお姫様だっこのほうがよかった？」

「え！？　べ、別にそんなことないよ／／／」

「そうか！？」

「そうだよ／／／」

「そうか」

にしてはすこし顔が赤かったような…。

「ねえ、…変なとこ…触ったりしなかった？」

「え！？　そんなことするわけないだろ」

「だってこのまえ私のスカートの中覗いたし…、Hな本も持ってたし…」

「スカートは不慮の事故だ。本は…言いようがありません」

「本当に触ってない」

「触ってない！！」

あ、けどおんぶしたとき胸は当たってたなー。決してわざとではない！！　お姫様だっこだと恥ずかしいだろ！！

「……」

「……」

なぜか暫く沈黙が続いた。

「（悠人君と2人っきりだ。これはチャンスかも…）」
「どうした、恵子！？」
「ねえ、悠人君って好きな人いたりする！？」
「なんで急にこんな質問を！？」
「（鈍感だ）えっと、答えてくれる！？」
「いや、まあ、俺も男子だから気になる女子はいるよ」
「だれ？」
「それは内緒だ」
「えーなんで！？」
「恥ずかしいからに決まってるだろ！！」
「悠人君もちゃんと羞恥心ってあるんだー」
「俺をなんだと思ってる！？」
そんな会話をしていった。

「……ねえ、私のことどう思ってる？」

「え！？　また急に」

「だから私のことどう思ってる？」

「えーと…、その」

あの、ちょっと顔が近い！！

「おいーす！！」

「恵子、ユウいる？」

言おうとした瞬間、薫、純一、マサが来た。
恵子は顔を遠ざけた。恵子の顔が真っ赤だった。たぶん、俺も赤いだろう。

「あんたら何やってたの！？　顔が真っ赤だし！！」

「「ひゅーひゅー」」

薫は何故か怒っていて、純一とマサは茶化してきた。

「何にもしてねーよ！！」

「本当に？」

「本当！！」

／／／」

「恵子の顔が赤いんだけど！！」

「やるなーユウ」

「まったくだ」

「俺は何もしてねーよ！！」

「まあ、恵子元気そうでよかったわ」

「心配したよ。終わった瞬間倒れちゃったから」

「それを運ぶユウかっこよかったぞー」

「うるせー！！」

「うん、みんなありがとう」

元気になったみたいだな。よかったよかった。

「私たちそろそろ行くわね」

「俺もそろそろ行くよ」

「うん」

「恵子はどうするの？」

「私はもう少し休んでから行くよ」

「わかった、んじゃまたあとで」

「うん」

こうして保健室を出た。

この後、バスケやサッカーの試合をしたり、梨穂子と香苗のバレーの試合を見たりした。

そして昼休み

お昼ごはんは、純一、薫、恵子（復活）、梨穂子、香苗、マサで食べることになりました。まあ、大勢ですね。

「あー、腹減ったぜ」

「ユウは特にがんばってたからな」

「田中さんを助けて、おぶってたしな」

「／／／」

「「むー」」

恵子は顔が赤くなり、薫と香苗はなんか悔しそうにしていた。そんなにおんぶってされたいものなのか。わからない。
梨穂子は弁当を食べていた。かわいい顔で食ってるなー。

「どうしたの、悠人？　私の顔じろじろ見て」

「いやー梨穂子のご飯を食べてる姿がかわいくて」

「そ、そう／／／」

「「「むー」」」

今度は恵子を含め、俺に睨みつけてきた。
そんなに褒めてほしいのか？　ますますわからない。

「やれやれだな」

「そうだね」

「何がやれやれだ！！」

「おまえが鈍感だってことだ」

「？」

「うらやましいぜ。俺なんて今剣道部の部長に…」

「そういえばそうだったね」

「???」

こんな感じで昼食を食べた。

午後もまあ、大変でした。自分からサッカーとバスケをやるって言ったんだけどね。

そして球技大会終了

いやー今日も疲れたなー。

今日は薫が2人っきりで帰りたいって言ったから、みんなが帰るのを待って、いっしょに帰ることになった。

「薫が2人っきりで帰りたいって珍しいなー」

「そ、そんなことないわよ／／／」

今日の薫なんかかわいいなー。

「球技大会めっちゃ疲れたー」

「あんたがんばってたしね」

「素直だな」

「いいでしょ別に」

「そうかい」

「ねえ」

「何だ？」

「き、気になる女子とかいたりする？」

またか…。流行ってるのかそれ。

「で、どうなの？」

「俺も男子だから気になる女子は何人かはいる」

「だれ？」

「おしえねーよ」

「なんでよ」

「恥ずかしいからに決まってるだろ／／／」

「ふーん（そのなかに私は入っているのかな）」

「んじゃ、俺こっちだから」

「あ、うん。んじゃまた明日ね（聞くのはまた今度でいっか）」

「おう」

薫と別れて家へと帰った。

本当に疲れていたのですぐに寝てしまった。

今日の美人な看護婦と（自主規制）や（自主規制）する夢が見たいなーと思いました。

第６話　球技大会？（後書き）

作者「改めて皆様、明けましておめでとうございます」

薫「おめでとうございます。この小説を読んでる方、アマガミのファンの皆様のますますのご健康を祈っております」

作「なんだ、いいことたくさん言ってると思ったら、棚町さんか」

薫「なんだってどういうことよ」

作「はいはい。まずは、テイルさん、感想ありがとうございます」

薫「ありがとうございます」

作「よかったなー。ファンがいて」

薫「本当にありがとうございます」

作「感想まだまだお待ちしてます」

薫「待ってまーす」

作「そういえばアマガミｓｓ　ｐｌｕｓ放送が始まったねー」

薫「そうね」

作「絢辻さん可愛かったなー」

薫「私とどっちがかわいい？」

作「えーと…」

薫「返答次第では…」

作「……あ、もうお時間がー！！」

薫「あ、ちょっと！！」

作「次回をお楽しみにー」

薫「逃げるな！！」

第7話　茶道部と秘密（前書き）

何かタイトルテキトーですみません。
第7話です。

第7話　茶道部と秘密

皆さん、こんにちは。今日も変わらない学校生活を送っています。ただいま昼休みです。今日は梨穂子と香苗と一緒に食堂で昼食を食べるところです。

「いただきまーす」

「「いただきます」」

因みに俺の昼食はカレーライスである。

「おいしー」

「梨穂子っておいしそうに食べるよね」

「まったくだねー」

「もぐもぐ…」

「あんま食べ過ぎるなよ」

「そうだよ。体重気にしてるんでしょ」

「あ…う、うん」

「「はぁー」」
「今度からダイエットするつもりだよ！！」
「どうだか」
そんなことを言いながら梨穂子はデザートを出していた。
「する気ないな…」
「そうだね」
「ねえ、悠人、香苗ちゃん」
「なんだ？」
「何？」
「実は私部活入ろうと思っていて…」
「へぇー。何部？」
「茶道部にしようかなと思うんだけど…」
「いいじゃん」
「うん、そうだね」

「それで…悠人にお願いが…」

「俺に？」

「今日一緒に部活来てくれない？」

「？」

「入部届け1人で出すのすこし心細いから…」

「そういうことか。…わかった」

「ありがとう！！」

そして放課後

俺は1－Bに梨穂子を迎えに行った。

「じゃあ梨穂子行こうぜ」

「うん」

和室

「すみません」

「すみませーん」

……反応なし。留守にしてるのかな？

「待ってようか」

「え？　いいの？」

「大丈夫だ。…たぶん」

「今たぶんって言ったよね」

「言ってない！！　まあ、俺生徒会長だし、大丈夫だ」

「そ、そう？」

そうこう話していると、扉が開いた。たぶん先輩たちが来た。

「誰だいあんたたち？　うちらの部室に勝手に入って」

「不法侵入」

「いやその…」

「ってあんたはたしか…生徒会長！！　そうか、とうとう私たちの部活を休部させに来たってわけか！！」

「むむむ…」

「休部？」

「しらばっくれてもだめだよ。部員が2人しかいないのはもうとっくにお見通し何でしょ？」

「させるものか」

「違います！！　僕は入部希望者を連れてきました！！」

「「入部希望！？」」

「はい。入部希望で来ました」

「ホントに入部希望！？」

「はい！！」

「よっしゃー、新入部員ゲットー！！」

「アンビリバボー」

「名前なんて言うの？」
「桜井梨穂子です」
「私は夕月琉璃子（ゆづきるりこ）。部長よ」
「飛羽愛歌（ひばまなか）。ザ・副部長」
「よろしくね、りほっち」
「あ、はい」
「それとあんたの名前なんだっけ？」
「加藤悠人です」
「そうか。よし、あんたもついでに入部しなさい！！」
「いやです」
「そういわずにー」
「おいでおいで」
「俺に茶法とか無理です」
「そう、まあ気が変わったらいつでも言って」
「いつでもウェルカム」

「そうすか」

変わんないと思うけど…

「あ、これ入部届けです」

「はいはい」

「部員って本当に2人だけだったんですか？」

「まあね。去年まではいたけど、みんな卒業しちゃってねー。今の3年生は茶道部0人でねー。残ったのが私たち2人だけ」

「そういうこと」

そういうことですか。

「さて、お茶でも飲みますか」

「あ、もう部活ですか。じゃあ俺はこれで…」

「まあまあ、せっかくだしお茶飲んでいきなさいよ」

「え！？　いいんすか！？」

「遠慮することないよ」
「ノープロブレム」
「そうですか、じゃあお言葉に甘えて…」
お茶を飲むことになった。
「はい、どうぞ」
「どうも」
「ありがとうございます」
「いただきます」
ズズッ
「あ、美味しい」
「美味しい」
「でしょ」
「いやー、あったまるー」

「4月も意外と寒いからねー」
「けど暑い時もある」
和室で飲むお茶は何か和むなー。
「梨穂子にも茶法とか出来るんですかね？」
「まあ、努力しだいだよ」
「努力なしでは何もできない」
「そうですね。頑張れよ、梨穂子」
「うん！！」
「いい返事じゃないか」
「ファイトー」
「頑張ります！！」
まあ、楽しくやっていけるだろう。
それ寄り俺は先輩方にある質問をしたかった。
「あのー、ところで先輩方に聞きたい事がありまして…」

「何だい？」

「2年生での俺の評判を聞きたいんですけど」

「何で急に？」

「少し不安で」

「良いと思ってる人もいれば、生意気だって思ってる人もいるなー」

「私が思うには自分が生徒会長になりたかった人が多分あまりあなたの事を良くは思っていないんだと思う」

飛羽先輩がこんなにしゃべるとは思わなかった…。

「今失礼な事考えた？」

「いえ、何も。そうですか…。わかりました」

「まあ、私はどちらかというと良いと思うが…／／／」

あの目つきが悪い（俺の第一印象）夕月先輩が照れながら言った。
案外可愛い一面もあるもんだなー。

「私も悪くは思ってない」

「いやー、ありがとうございます」

「私も悪く思ってないよ」

「ありがとな、梨穂子」

「けど何で入学したばっかの…えーと…なんて呼んだらいい？」

「加藤じゃ疎いのでできれば名前で…」

「じゃあ…悠人」

「はい」

「悠人は何で生徒会長になったんだ？」

「気になる」

「私も」

エロ本に釣られて、生徒会長になったとは言えん。他にも理由はもちろんあるよ。

「それは…いろいろ大人の事情がありまして」

「悠人はまだ学生」

う…、飛羽先輩はけっこう痛いところついてくるなー。

「実は俺留年して「それも嘘」はい、すみません」

「ま、いろいろ大変なんだね」

「そうなんです！！　いろいろ大変なんですよ」

「あ、逃げた」

「逃げた」

「逃げましたね」

はい、逃げましたよ。コンチキショー！！

「俺そろそろ行きますね」

「もう行くのかい？」

「そろそろ真面目に部活してください」

「まあ、そうだね。部員も増えたし」

「遊んでばっかはいられない」

「りほっち、これから頑張ろう！！」
「おおー！！」
「じゃあ俺はこれで…」
「またおいでよ」
「待ってる」
「わかりました。梨穂子頑張れよ（多分2回目）」
「うん。今日はありがとね」
「おう」

俺は和室を去った。
あ、鞄教室に置きっぱなしだった…。
…しょうがない。取りに行くか。

1―A教室

さて、鞄もとったし、帰るか。

……何か手帳みたいなのが落ちてる。誰のかはわからない。

さて、どうする？

？放置

？落とし主を探す

？中を見る

？破く

？はまずない。？もない。俺はこんなデリケートな事はしない…けど少し気になる。？も何かダメな気がする。やっぱ？かー。

とりあえず手帳を拾ってみた。

誰のだろう。

……何か足跡が聞こえてきた。何かものすごく急いでいるような。

ガラッ

教室の扉が開いた。

絢辻だった。

「ハアハアー。あれ？　悠人君が持ってる手帳って…」

「あれ？　これ絢辻の？」

「中見たの？」

「いや、別に」

「見たんでしょ？」

絢辻は俺に近づき、ネクタイをつかんできた。

「もう一度聞くわよ。見たんでしょ？」

「いや、だから…」

「正直にいいなさい」

「そんなに大事なこと書かれているのか？」

「私の質問に答えなさい！！！！　見たの、見てないの、どっち！！！？」

こえーー！！！！　いやマジで怖い。絶対裏の顔あるとは思ったけど、まさかここまですごいとは思わなかった。

さて、この状況をどうする？

？たたかう
　　にげる
　　どうぐ
　　まほう

ゲームのコマンド風にしてみました。ってやってる場合じゃない！！！

まず、俺魔法なんて使えない！！　道具も特にないし…。逃げたらますます殺されるだろう…。かといって闘うもちょっと…。

「どうなの！！！！？」

ぐはっ！！！　Ｌｖ、９９の絢辻が攻撃してきた。

本日２回目のコンチキショー！！　本当にどうするか。

　　たたかう
　　にげる
？むねをさわる
　　すかーとをめくる

って俺はこんな時になに考えてるんだ！！！　んなことしたら確実にお陀仏になる！！！

改めて…

?·あやまる
どげざする
とにかくあやまる
とにかくどげざする

もう謝る以外ないのか…。…何とか説得しよう。

「絢辻、聞いてくれ」

「何よ?」

「俺は手帳の中を見ていない」

「嘘よ」

「嘘じゃない」

「本当に?」

「本当だ」

「……信じられない」

「何で!?」

ここは「信じるわ」とか「わかったわ」って言うところだろ！！！

「あなたが気にくわないから」

「何で？」

大方予想はついてるが…

「あなたが急に生徒会長になったからよ」

やっぱりな。だろうと思ったわ。

「そりゃー気にくわないだろうな」

「何であなたが生徒会長なのよ！！」

「俺も好きでやってる訳じゃねー」

「じゃあ何で生徒会長になったのよ？」

「……ここで話すのもなんだし…。どっか違うところに行こう」

「……そうね」

俺たちは場所を移動することになった。

とある神社

「ここなら誰も来ないはずだわ。さあ、何で生徒会長になったの？」

「ジジイ…いや、校長に頼まれたから」

「何であなたに頼んだの！？」

「それは俺も知らん」

「断れなかったの？」

「そうでもなかったと思うけど…。まあ、いっかって思って」

「断れたのに何で断わんなかったのよ！！　他に生徒会長になりたかった人はいっぱいいるはずなのに…」

「俺は高校に入る前から校長にはいろいろ世話になったしな。少しは感謝しなきゃなーと思って…」

何割かはエロ本目的だったけど…。

「世話って何よ？」

「それは言えない！！」

「……そう」

案外すんなり諦めたな。

「えっと…そうだ！！　俺は手帳の中身なんて覗いてない！！！」

「本当だね？」

「うんうん」

「……わかったわ。信じるわ。あーあ、せっかく優等生ぶろうと思ってたのに…」

「すごい猫の被りようだったな」

「う、うるさい／／／／！！」

お、照れた。

「別に誰かに言うつもりはないから」

「本当に？」

「少しは信じろ」
「わかったわ。じゃあ、帰りましょ」
「え！？　あ、ああ」
「ほら、行くよ」
俺は絢辻に袖口をつかまれ、神社を後にした。

「あーあ、酷い目にあった」
「五月蝿いわね。謝ったでしょ」
「性格戻さなくて良いのか？」
「今更悠人君の前で戻さなくてもいいでしょ」
「そうかい」
「……私は生徒会長になりたかった」
「チャンスはあると思うぞ」

「来年でしょ」
「そうだ。選挙で俺に勝てばなれる」
「来年も生徒会長やるつもりなの？」
「あ…」
考えてなかったなー。
「未定」
「そう」
「まあ、頑張れよ」
「あなたに応援されても嬉しくないわよ／／／」
「の割には少しは顔赤い気がするが」
「う、五月蝿い／／／！！！」
「ははは」
絢辻も可愛いところあるなー。

「じゃあ、私はこっちだから」

「ああ」

「絶対に今日のこと言っちゃダメだからね」

「約束する」

「じゃあね」

微笑みながら言ってきた。やべっ。超かわいい…。

「じゃあな」

俺は家へと向かった。今日は何かやけに疲れた。精神的な面で。

あー、夕飯の買い出し行かないと…。

…そうだ。純一の家に行こう。

純一の家の前

ピンポーン

「隣の晩御飯です！！」

「何だよ…」

「飯食わせてくれ」

「何でだよ！！」

「あ、ユウ君」

「ハロー、美也ちゃん」

「どうしたの？」

「飯食いに来ました」

「あがってあがって！！！」

「おい、美也」

「お邪魔しまーす」

「はあ…。やれやれだ」

俺は橘家の夕ご飯をご馳走になった。因みに肉じゃがだった。

その後、純一の部屋に行った。

「なあ、純一。お宝鑑賞会しようぜ」

「いいねー」

俺ら2人はお宝鑑賞会（要するにエロ本鑑賞会）を始めた。

「うおー、この女の子なかなかだなー」

「だろ？」

「これはけっこう過激だなー」

「確かにねー。でもそれがまたよかったり…」

「なるほど」

どんなもの見てるかは…、此処では言えないのでご想像で。いや、想像もしないで下さい…。何か恥ずかしいんで…。

ガチャ

扉が開いた。

「にぃに、ユウ君、一緒に…、って何見てるの！？」

「「あ…」」

この後美也ちゃんにこっ酷く叱られました。
そりゃあ俺たちが悪いよな。

帰る頃には２２時を回っていた。

「夕飯食わせてくれてありがとうな」

「今度何かお礼しろよ」

「はいはい」

「またいつでもおいでね」

「はいはい。んじゃねー」

「おう」

「バイバイ」

俺は橘家を後にした。

「美也」

「何にぃに？」

「お前ユウのこと好き？」

「は！？　な、名に行ってるの／／／」

「ユウが来た時やけに嬉しそうだったから」

「／／／。にぃにのバーカ！！！」

「そうかい」

俺は帰ってとっとと風呂に入って寝た。今日の夢は女性と混浴の夢がみたいです。…気持ち悪いですよね、すみません。世界が平和になる夢がみたいです、はい。

第7話　茶道部と秘密（後書き）

作者「今回は早く書けたな」

絢辻「そんなんに限って誤字脱字が多いのよねー」

作「面目ない…」

絢「まったく…。えっと、感想お待ちしてますので」

作「お待ちしてまーす」

絢「それじゃあ」

作・絢「「次回もお楽しみにー」」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0176z/

アマガミ　とある男子高校生の物語

2012年1月14日11時53分発行